

Japanese in the New Zealand Curriculum
ニュージーランド日本語カリキュラム

Ministry of Education
Te Tāhuhu o te Mātauranga
ニュージーランド教育省

日本語版発行：国際交流基金日本語国際センター
翻訳：赤羽三千江

Material from *Japanese in the New Zealand Curriculum* is reproduced by permission of the publishers Learning Media Limited on behalf of the Ministry of Education, P O Box 3293, Wellington, New Zealand, © Crown, 1998.

はじめに

いま海外の日本語教育は、初中等教育において拡大しつつあります。高等教育とは異なり、年少者に対する日本語および日本に関する基礎教育を担う初中等教育においては、とりわけ、統一性や一貫性のあるシラバスやガイドラインの整備が重要となるのです。すでに本格化している国々においても、さらに充実を図るために、常にシラバスやガイドラインの最新化が行われています。その動向や成果は、これから本格的に取り組もうとする国々にとっては、きわめて重要な参考資料となるのです。国際交流基金のみならず、海外の日本語教育に携る関係者にとっても、それぞれの国や地域での教育指針を知り、的確に対応するうえで貴重な情報となっています。日本語国際センターでは、それら原本を附属図書館に収蔵して関係者に提供してまいりましたが、和訳がなかったため、原語を解する方々のみの利用に限られていました。また、ホームページ上の「国別情報」でも詳細に紹介することができなかつたのです。

その不都合を解消することによって関係者間の相互交流を図り、より一層日本語教育を拡充するための一助として、このたび7カ国（韓国、中国、インドネシア、ニュージーランド、米国*、英国、ドイツ）から9点のシラバス・ガイドラインを選び翻訳刊行（分冊）することといたしました。同時にホームページ上でも公開いたしますので、皆様はお手元で世界の日本語教育のさまざまな取組みの背景や展開を見ることができるのです。ひとくちに日本語教育といいましても、実に多様な目的や目標、方法や手段、そして課題があることがお分かりいただけるものと思います。むろん、今回の対象がすべてではなく、引き続き多様な取組みをご紹介してまいりたいと計画しております。

今回の翻訳刊行は、それぞれの原著作者・機関（別記）のご理解とご協力なしには実現いたしませんでした。日本語教育に携る者同士の共感が実を結んだものと思います。ここに、謹んで謝意を表します。

2002年（平成14年）3月

国際交流基金日本語国際センター
所長 加藤 秀俊

*米国分は、ホームページ上での公開のみ。

日本語翻訳版の刊行にあたって

本書は“Japanese in the New Zealand Curriculum”と“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material : Part 1”を日本語に訳したものです。

ニュージーランドでは、初等、中等教育機関における日本語教育のために、1993年に“Japanese – Draft Syllabus for Schools”（日本語 - 学校用シラバス案）が出され、日本語教育のシラバスとして用いられていました。これとほぼ同じ時期に、ニュージーランド教育省は、新しい評価制度、方法の導入とそれに合わせた学校カリキュラムの改変を決定し、それに向けての準備が始まっていました。この計画に合わせて、1996年から上記のシラバスに変わる新しい“Japanese in the New Zealand Curriculum”の開発が始まり、1997年には“Japanese in the New Zealand Curriculum”と“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material 1”が各学校に配布され、1998年から導入が開始されました。

新しいカリキュラムは、主に9年生（13歳）から13年生（17歳）を対象としたものです。しかし、1998年からより低い学年（主に7年生、8年生）で外国語教育を導入する政府方針が決定され、多くの小学校で日本語が教えられるようになりました。その際、このカリキュラムの初級の段階の項目が学習項目として採用されています。

ニュージーランドの学校教育に関して、このカリキュラムに強制力があるとはどこにも明文化されていませんし、教え方や時間数も学校や生徒の状況に合わせて、各学校で自由に裁量してよいことになっています。そのために、本文の学習項目や文型、学習活動さらには評価方法についても「suggested（参考）」という表現が使われています。

中等教育前期の終了時、つまり11年生の終わりと後期の終了時、13年生の最後には全国統一の国家試験がありますが、これも受験は生徒の自由意志ということになっています。この国家試験は、いわば学習到達度の検定試験といったもので、不合格だからと言って進級できなかつたり、卒業できなかつたりする事はありません。が、この試験の結果が就職や高等教育への進学などの際に必要とされますから、結果的には高校生のほぼ全員が受験しています。この国家試験の出題基準、範囲は上記のカリキュラムに基づくわけですから、結果から言えば学校ではこのカリキュラムに基づいて日本語を教えなければならないこととなります。

“Japanese in the New Zealand Curriculum”には教授法、言語学習の基本概念、日本語学習の特徴や、学習項目などが掲載されています。“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material 1”は、漢字および漢字学習、学習項目や語彙のリストです。これらが上記に述べたように、ニュージーランドの学校教育における日本語の「指導要領」であり、同時に国家試験の出題基準、範囲です。

“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material 2”も1998年に完成し、各学校に配布されました。これは、“Japanese in the New Zealand Curriculum”と“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material 1”の中からいくつか重要な項目を選んで、教え方のアイデアやさらに詳しい文法説明などを掲載し、さらに日本語教育にとって有用な情報、コンピュータ、インターネットに関する情報、大使館広報文化センター、その他の日本に関連する機関や団体の連絡先なども載せています。一般的な意味での「シラバス」あるいは「カリキュラム」には含まれない内容ですので、今回の翻訳には入っていません。

ニューサウスウェールズ大学非常勤講師
赤羽三千江

目 次

序文	1
はじめに	2
なぜ日本語を学ぶか	3
効果的な言語学習	4
学習における教師と学習者の関係	5
情報技術工学の活用	7
文法の位置づけ	7
学習者の間違いへの対応	8
日本語学習の特徴	8
語学学習の基本的技能	10
語学学習における態度と価値観	10
日本語カリキュラム	11
本書の構成	12
学習目標	13
学習段階（レベル）	13
学習領域	14
到達目標	15
文型、表現の例と例文	16
学習活動例	16
評価方法例	16
言語の発達段階	17
学習課程の設定について	19
ニュージーランド国家資格認定の枠組みとユニットスタンダード	20
日本語カリキュラム - 学習段階 1（レベル 1）	21
日本語カリキュラム - 学習段階 2（レベル 2）	26
日本語カリキュラム - 学習段階 3（レベル 3）	31
日本語カリキュラム - 学習段階 4（レベル 4）	36
日本語カリキュラム - 学習段階 5（レベル 5）	41
日本語カリキュラム - 学習段階 6（レベル 6）	46
日本語カリキュラム - 学習段階 7（レベル 7）	51
日本語カリキュラム - 学習段階 8（レベル 8）	56
編集上の都合により、冊子版シラバス・ガイドラインシリーズと頁数に異同があります。	

序文

ニュージーランドでは通商、外交、教育、観光および国際的な文化交流において有意義かつ有効な貢献のできる、複数の言語が話せる人材が必要とされている。

日本との経済的、文化的交流関係が深まるにつれて、若い世代では特に日本が重要視されるようになった。両国間の通商、観光、外交関係の発展とともに、学校の児童、生徒でも個人レベルで日本人と接触する機会が増えている。

本書『ニュージーランド日本語カリキュラム』は、ニュージーランドの初等および中等教育における日本語学習の指針、基礎となるもので、生徒（学習者）に可能な限り早い段階から日本語学習の機会を提供することを目的としている。

また、本書は、国家というレベルを超えて生徒が知識を増やし、日本の人々と有意義な交流ができるようになることを目的としている。（本書に基づく学習によって）生徒はさまざまな日本の慣習を学び、日本文化に対する理解も深めていけるだろう。

本書は（初等、中等教育における）日本語教育に携わっている教師によって書かれ、さらに諸方面からの意見、提言も取り入れられている。1995年に試行版が学校教育機関および関係機関に配布され、そこから寄せられた意見、提言を盛り込んで完成されたものである。

著者、カリキュラム検討委員会、教育関係者を始め、あらゆる段階でその知識、経験、時間をこのために提供してくれた現場の教師に深く感謝の意を表したい。

（署名）

Howard Fancy

(Secretary for Education)

はじめに

“The New Zealand Curriculum Framework^(訳注1)”(「ニュージーランドのカリキュラムの枠組み」、ニュージーランド教育省 (Ministry of Education)、1993年)では、語学(英語および外国語)学習が必修科目になっている。

学校児童生徒が可能な限り早い段階で外国語を学ぶことは、学習過程全般において有益である。学習段階の早い時期で、ある言語を学習することは、他の言語の学習技能も発展させると共に、自身の言語についてより深い洞察をもたらす。語学学習は児童生徒の知的、社会的、文化的発達を促し、異なる文化に属する人々の思考、行動についての認識、理解を深め、より良い国際関係の樹立に貢献する。児童生徒は太平洋地域、アジア、ヨーロッパ言語から学習する言語を選択できる。これらの言語は、どれをとってもニュージーランドとその国際関係にとって重要である。(“The New Zealand Curriculum Framework”、10p.)

本書の目的は、ニュージーランドの学校で日本語を教授する場合のその基本的な枠組み、方法論を提示することである。上記“The New Zealand Curriculum Framework”の基本理念に基づいて、日本語を教えている(あるいは日本語科目を開設しようとしている)初等および中等教育機関が、その実施の段階で本書を指針として用いるのが望ましい。

本書では継続的な日本語学習の進度(その目安)を提示しているが、それは到達目標(Achievement Objectives)として8段階(8 levels)、学習領域(Strands)として3領域から構成されている。(到達目標については後に詳述するが)「学習領域」とは、以下の3領域である。

言語技能 (language skills)

コミュニケーション機能 (communication functions)

日本文化事情 (Japanese culture)

本書では、上記の3領域を総合的に捉え、言語の伝達機能に重点を置き、教授および学習の過程が学習者(児童、生徒)のニーズに合うように考慮している。

また、本書には実際の教授、学習に関するアイデア、可能な文化的実践、体験や、教授、学習過程の一環としての評価方法に関する提案も記載し、学習段階と学習領域に合った文型や表現も可能な限り多く載せた。学習に関するアイデアは教師が教案を作成する時の参考であり、実際の現場での教授、学習は、こうした例に拘束されるものではない。また、参考資料として本書には“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material”が各学校に配布される^(訳注2)。

(訳注1) “The New Zealand Curriculum Framework”は、ニュージーランドの学校教育機関で設けられているすべての科目の枠組み、教授、学習目標を設定したもの。各科目のカリキュラムは、これに従って新たに作成、あるいは改定されることになり、本書「日本語カリキュラム」は、1997年に出版、導入が開始された。

(訳注2) “Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material – Part 1”は本書と共に、“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material – Part 2”は1998年に配布された。

なぜ日本語を学ぶか

ニュージーランドが今後、国際関係、すなわち外交、貿易、技術発展、観光、文化的交流などの諸側面において貢献し、次世代に対する人道上有効かつ有意義な役割を果たしていくためには、各種の言語(および文化)に精通した人材を育成していくことが必須である。我が国の教育制度においては、この点を考慮して若い世代の人々により多くの外国語学習の機会を提供していく必要がある。

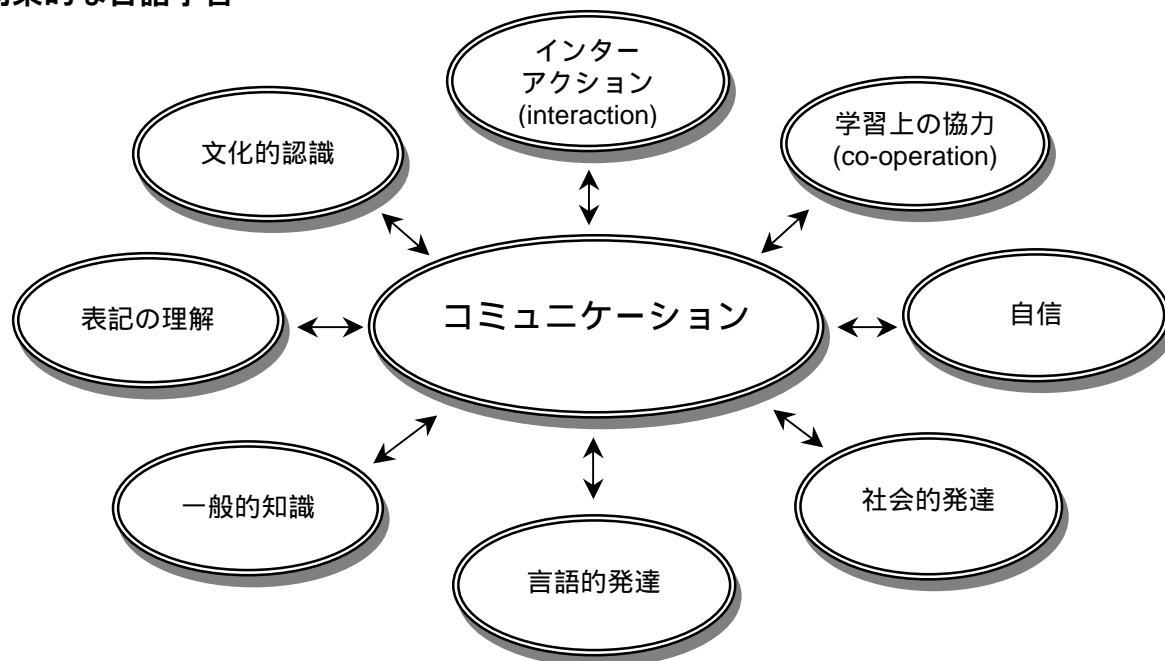
日本語はニュージーランドにとって、両国の経済的、文化的関係を考える上で重要な言語である。近年の観光業における両国の関係の深まりや個人的な接触の増加はその一例である。加えて、ニュージーランドの主要な言語および文化と全く性質の異なる日本語および日本文化に対する学習者の興味も高まっている。また、マオリおよび太平洋諸島文化圏の日本語学習者は、母語との類似から日本語の発音は容易であることを発見している。

日本語学習を通じて、ニュージーランドの学習者は以下のような教育上の目標を達成することが望ましい。

- ・ 国境や文化のステレオタイプを超えて、異なる言語、文化、国籍を持つ人々に対する寛容で積極的な態度を身につける。
- ・ 日本人がどのように思考し、行動するかを学ぶことにより、日本文化および言語に対する敬意を持つ。
- ・ 日本人とより効果的に意思の疎通ができ、日本人とよりよい関係を維持、発展させることができる。
- ・ 貿易、観光、旅行、職業、教育および社会的な側面で、自信を持って日本人と交流できる。
- ・ 日本語以外の言語を(有効に)学べる技能、理解力などを獲得する。
- ・ ニュージーランド国内および国外における仕事の選択肢を広げる。
- ・ すべての人間は相互に依存しあう関係であることを理解する。

本書はより多くの学習者に日本語学習の機会を提供し、言語の重要性の認識を促進し、現行の初等、中等教育機関での日本語教育課程をより効果的なものにし、全体としての日本語教育の発展を促すことを目的としている。

効果的な言語学習



言語の学習ではコミュニケーションが主要なポイントである。効果的で刺激的な、多様なコミュニケーション活動が言語の教授、学習の基礎となる。このような活動を通してこそ、たとえば文化的な認識でも生徒は自信を持てるようになり、有意義なコミュニケーションに参加できるようになる。

日本語でのコミュニケーションは、特に早い学習段階では非言語的なコミュニケーション活動をすることで、より内容の充実したものになるだろう。これには、視覚的な手がかり（合図や指示など）ジェスチャー、パントマイムなどがあり、教師や学習者が自分の言ったことを繰り返したり、表現を変えて言ったり、あるいは発言のポイントに例を加えたりして、内容を明確にすることなども含まれる。学習者には正しい（よりよい表現の）例を（豊富に）与えるのがよい。これらの方法は、学習者の興味、学習段階および経験に即したもので、しかも現実的な脈絡に沿ったものでなければならない。

語学の学習においては、教師も学習者もできるだけ実際の事物を利用し、生徒には、読み、聞き、話し、書くという4技能の練習が、常にバランスよく与えられるのが望ましい。一般に初級段階では簡単で、単純な項目を学習するが、より高度で複雑な項目でも、学習者の興味や能力に応じてできるだけ早く導入していくのがよい。

学習者がペア、または小グループで学習活動をする時、学習者相互のインターアクション（interaction）を活発にし、それによって学習に対する自信を持たせていくことが必要である。教師が様々な脈絡で有意義な表現をできるだけ多く練習させることで、学習者に自信を持たせることができる。学習者が日本語でコミュニケーションをする練習を重ねるに従って、さらに高度な表現を使いこなせるようになり、自力で自発的なコミュニケーションの能力を獲得できる。

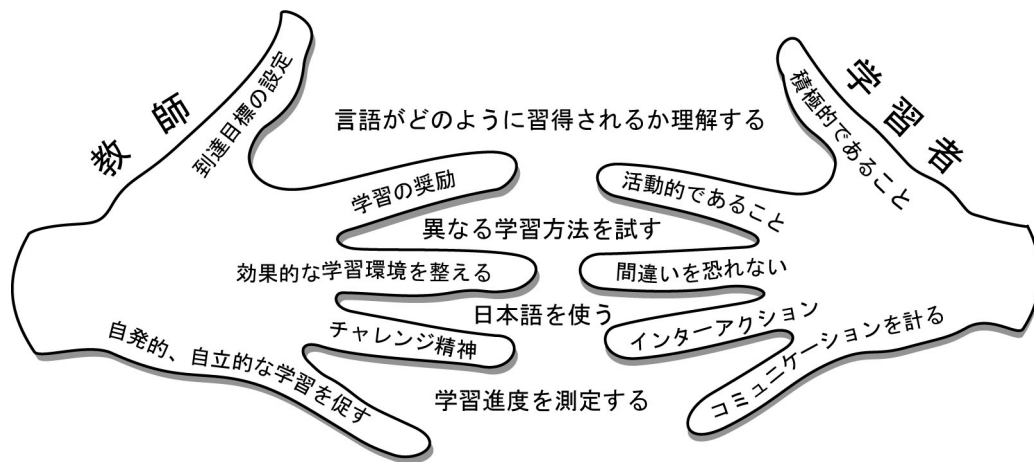
学習者というものは、多様な学習活動を通じて言語を習得していくものである。そうした学習活動を行うことは、よりよい学習環境を整え、生徒の学習に対する興味、意欲を高め、生徒が学習そのものを楽しめるようにすることでもある。

コミュニケーションを中枢の目的とした日本語教育には、学習目標として特定の項目が含まれている。これらの項目は、基本的な到達目標を達成できるように、学習過程（段階）において慎重に配置され、統合的に教授されていくことが重要である。効果的な日本語学習課程（日本語教育プログラム）に含まれるべき項目として、以下のようなものがある。

- ・ 教室では主に日本語を用いる。
- ・ 文法の学習は、生徒が日本語のメッセージを理解したり、表現したりするために必要な場面の中で学習する。
- ・ コミュニケーションは、いつも現実的な目的に沿った適切な方法でなされる。
- ・ コミュニケーションは、生徒にとって重要な、有意義な内容を含んでいる。
- ・ コミュニケーションは、特に会話では予測不可能な展開をし、暗記して繰り返すことはできないことが多い。
- ・ 聴解の能力は、言語学習において重要な基本技能である。
- ・ 生徒自身が日本語で会話をすることが重要である。
- ・ 教室での学習活動では、ペア、グループの活動を取り入れたり、生徒も教師も自由に動き回るなど、臨機応変に学習活動を行う。
- ・ 評価（テスト）では、コミュニケーション能力に重点を置く。
- ・ 日本文化事情（現代的な表現や、日本人の価値観、習慣、社会構造、宗教、信仰など）は、言語学習活動の一部として認識する。
- ・ 生徒自身の文化も含め、日本文化の諸側面を異なる文化と比較してみる。

学習における教師と学習者の関係

学習における教師と学習者（生徒）の関係は、学習段階に応じて変化していくものである。学習言語を使うことに生徒が慣れ、学習において生徒の自立性が高まり、学習に対する生徒の自信が深まるに従って、教師の果たす役割も変化していく。教師は、適切な言語表現の例を示したり、生徒が間違えてもそれで自信を無くしたりしないように配慮して、生徒にとって学習しやすい環境を整えていく役を担っている。生徒の言語の能力が発達していくにつれて、学習は教師主導から、学習者の自立的な活動へと変化していく。そこに至る過程で、教師も学習者も共に学習に対する貢献と責任を持っている訳である。



教師は以下のような点に留意すべきである。

- ・ 生徒にとって、明確で到達可能な学習目標を設定する。
- ・ 間違いを指摘するよりも、正しい、あるいはよくできた学習言語の使用に注目し、生徒が学習に対して自信を深めていけるように指導する。
- ・ 言語学習が（生徒の内面で）どのように進行しているかに留意する。
- ・ 教室内に学習に適した雰囲気、学習環境を作り出す。
- ・ 学習の方法やスタイルについて、生徒一人一人の個性を理解し、尊重する。
- ・ クラスのコントロール（教室内的の指示など）もできるだけ日本語を使う。
- ・ 教師と生徒の間だけでなく、生徒同士のコミュニケーション、インターアクション（interaction）を促す。
- ・ 生徒の学習進度をはかる時に、同時に生徒の思考方法、興味、嗜好、ニーズにも留意する。
- ・ 生徒の自発的な言語の使用、発話を促し、その質を高めるために有効で有意義なフィードバックをする。
- ・ 言語学習の段階は生徒によって異なる。言語の4技能を統合的に捉えて、生徒の学習が直線的ではない発達を示すことに注意する。
- ・ 生徒が自立的で自発的な学習態度を発展させるよう指導する。

生徒は以下のような点に留意すべきである。

- ・ 言語と文化に積極的、肯定的な態度で臨む。
- ・ 言語学習の過程そのものに対しても理解を深める。
- ・ 自分が既に獲得している言語学習の技能を認識し、それを基礎にしてさらに学習能力を伸ばす。
- ・ 言語の学習で自分が何を達成しようとしているか、理解する。
- ・ 教室を超えた場面でも有効な、言語を学ぶ技能を発展させる。
- ・ 蓄積的、継続的な言語学習を心がける。
- ・ 現在学んでいる言語に集中する。
- ・ 言葉の意味を理解するための「推測する」能力を発展させる。
- ・ 言葉の意味や定義を見つけ出す習慣（辞書を使う、等）を発展させる。
- ・ 母語も含めて、言語的な能力を発展させるために積極的に言語を使うよう、心がける。
- ・ 間違いも言語学習のごく自然なプロセスの一つであることを理解する。
- ・ 参考書や資料の適切な使い方、役立て方を学ぶ。
- ・ 自分の言語学習の目標に合わせて、学習の発達段階を（客観的に）評価、測定する。

情報技術工学の活用

言語の学習活動においても最新の情報技術工学の成果を有効に利用することを勧めたい。これによって生徒に、より多様で幅広い学習の機会を与えることができ、学校の教室での授業が受けられない生徒にも、有効な学習の機会を与えることができる。最近の情報工学の成果から、教師は様々な教授の手段、方法を得ることができ、小グループや生徒同士の学習進捗の評価にも使えるものが多い。日本語ワープロも学習に効果的である。ランゲージラボも入手しやすくなってきているし、インターネットを通じて日本だけでなく、他の国の情報にもアクセスできるようになってきた。ニュージーランド国内、および国外の日本語話者とコンピュータで通信することも、学習に有効であろう。

文法の位置づけ

文法は、コミュニケーション機能に必要な項目を、その機能に即して学習していくのが最も効果的である。学習者の言語活動の場面を考慮して、コミュニケーションに必要な語彙や文法を教えるようにする。学習においては、より単純な文法を先に学習するのが一般的だが、コミュニケーション機能によっては、より高度な文法、あるいはより複雑な語彙を導入することもあるだろう。しかし、あまり多くの例外事項を提出して生徒を混乱させることがないように配慮しなければならない。例えば、学習段階1（レベル1）では「とじる」という言葉を教師が（指示として）生徒に言うかもしれないが、生徒自身がそれを使うことまでは要求しない、というような事柄もここに含まれる。

生徒自身が言葉を使いこなせるようにする過程で、教師はその適切な用法、例文を提示、導入し、生徒はそれを理解して、練習し、それから自発的に使えるようにしていく。

学習者の間違いへの対応

教師は、生徒の間違いについて建設的な方向での処置を考えねばならない。間違いは言語学習の過程で常に起こることである。不完全な言語的知識しかなくても、生徒は優れた言語伝達の技能を持っているかもしれない。自発的な会話では、なめらかな会話の進行という点を考慮して、間違いは(その場面では)そのままにしておいて、生徒の自信を損なわないようにする配慮も必要である。生徒は、学習が進むに連れて、より正確な表現を身につけていくことができるだろう。それは、ちょうど子どもが母語を発達させていく過程に似ている。生徒は自分で、正確な知識が効果的なコミュニケーションには必須であることを理解していくものである。

日本語学習の特徴

日本語の表記は、教師にとっても生徒にとっても学習上の重大なポイントである。中国語に起源のある漢字と表音記号である平仮名、片仮名の学習は、生徒に新たな学習の側面を開くものである。

ローマ字表記は日本ではあまり一般的なものではない。従って、学習のできるだけ初期の段階で日本語特有の表記に触れさせることが望ましい。実際にいつ導入するかは各教師の判断によるものだが、生徒には様々な学習活動を通じて日本語の表記の学習を楽しませるのが望ましい。表記の学習をしなくてもある程度の日本語は習得できるが、表記を学ぶことでより高度な日本語学習の達成が可能になる。

本書の日本語カリキュラム - 学習段階 1 (レベル 1) では、初級の、また若年の学習者には日本語のすべての表記を学習する時間を取ることは難しいであろうとの判断から、表記の習得を必修の項目には設定していない。

生徒が日本語の読みの練習をする時、既習の文字や文章の脈絡から読み方や意味を推測できるだろう。コミュニケーション・アプローチは言語の習得のために有意義な指針であるが、平仮名 50 音図を使うことは、日本語の発音に生徒を慣れさせるために有効であろう。

日本文化に対する理解のためにも、書く練習では正確できれいな書き方、最低限判読可能な表記の技能を身につける時間を取るのが望ましい。平仮名を正しい書き順で書けるようにすることは、次の段階の漢字学習のためにも重要である。

漢字は、どの学習段階でも、教師の能力や生徒の興味、学習の発展に合わせて適切に導入していくことが望ましい。ある漢字を導入したら、その漢字の音読みも訓読みも教えていく方がよい。本書では、日本語カリキュラム - 学習段階 2 (レベル 2) の終了時までには平仮名、学習段階 4 (レベル 4) の終了時までには片仮名の学習を終了し、学習段階 5 (レベル 5) から学習段階 8 (レベル 8) にかけて、漸進的に漢字の学習を進めるように設定している。生徒は、書ける漢字よりも読める漢字の方が多いのが普通である。教科書やその他の教材でよく見かける(実際に使用頻度の高い)漢字には生徒も慣れやすいだろう。多くの生徒は、漢字学習に特に興味を持つようになる。本書と“Support Material – Part 1 –”に挙げた漢字は、継続的、蓄積的な漢字学習の指針となるよう、配列してある。

日本語学習においては、普通体の導入も大きな課題である。生徒の使える表現をより豊かにするために、普通体もできるだけ早い段階で導入するのが望ましい。生徒は、フォーマルではない会話などで普通体が出てきた時に、その意味を理解でき、またどのような場面で使うのが適切かを知る必要がある。辞書形は、日本語の辞書を使うためにも必要である。本書の語彙リストでは動詞は辞書形で提示し、表記の統一のために、一部を除いて、例文も普通体で提示してある。

敬語（待遇表現）も、日本語学習で問題になる点である。学習者には難しい項目であるが、敬語は日本文化、社会の複雑な一面を示すものであり、それ自体が日本文化の反映であることも理解する必要がある。この点を考慮して、本書では日本語カリキュラム - 学習段階 1（レベル 1）から敬語（待遇表現）を提示している。

本書は、英語を母語とする学習者を主な対象者として想定している。英語に類似している他の言語を学習するより、日本語学習にはより多くの時間が必要とされるだろう。ある言語の特定のレベルを習得するのにどのぐらいの時間が必要とされるかは、学習者の性格、能力、実際の学習時間、どの程度継続して学習しているかが係わる問題であり、一概には言えない。

語学学習の基本的技能

既に述べたように、言語の学習は、学習全般における基本的な技能の発達に貢献するものである。（“ The New Zealand Curriculum Framework ”参照）。語学の授業で必須のコミュニケーションの技能は、本書の「コミュニケーション機能（Communication Functions）」の項に記述してある。言語的および非言語的なコミュニケーションは、社会、文化および言語の統合された形であり、適切な言語表現を通して相手に理解される。

情報伝達の技能は、情報そのものを分析、再構成し、異なる見解、意見を翻訳し、意見と事実を識別する訓練を通じて培われていく。その過程で学習者は、問題解決の技能や想像力、思考能力を養い、自分の言語（母語）と学習している言語の関連を自分の力で構成していく。新しい言語を学んでいくことは、理論的、創造的、批判的な能力を養う機会を提供するものである。

社会的な能力、他者と協力していく技能は、学習の過程でグループやペアの活動を通して発達させていくことができる。ペアやグループでの活動は、他者を尊重し、協力して何かを遂行する技能を養うのに適している。

自己を管理し、コントロールする技能、学習能力も言語習得の継続的、発展的性質、および既得の言語技能の再考、言語の実践的な練習の繰り返しの必要性により、言語の学習を通して養うことができる。本書の「学習活動例（Suggested Learning Activities）」は、生徒自身の学習に対する責任を認識させ、「評価方法例（Suggested Assessment Activities）」は、生徒自身に自分の言語技能の発達を評価する方法を例示している。

数学や計算に関する技能は、計量、日付、時間に関する表現を含めて、数学的な事柄を日本語で表現することで、補強、強化するように提言している。

身体技能の発達も言語学習の過程に含めることが可能である。その方法は、小学校のレベルではスポーツ、ゲーム、ダンスなどを含む文化的行事を学習過程に組み込むことなどが考えられる。

語学学習における態度と価値観

文化、社会的な態度や価値観も実際の授業に反映するよう提言したい。学校教育の一環として本書も、生徒自身の価値観と信念を確立し、同時に自分とは異なる価値観や信念を持つ他の人々をも尊重することを学んで行けるよう支援するものである。個人の、そして同時に全体の中の一人としての基本的な態度、価値観を構築し、生涯続く教育という過程に対して、肯定的かつ積極的な態度を持てるよう生徒を支援することが望ましい。生徒は自分の国や言語を、日本および日本語と比較、対照する事で、自分と自分の属する社会や自らの態度、価値観を再考、再認識していこう。

日本語カリキュラム

本書の日本語カリキュラム (Japanese curriculum) は 8 段階 (8 レベル、8 levels) の構成になっており、各レベルにそれぞれの到達目標が設定されている。それらの到達目標をどのように達成していくかは、各学校および教師の責任に任される。本書は、初等、中等教育機関で新たに日本語教育課程 (科目) を設置していく場合に、現場の教師が各自の学校の状況や必要に応じて日本語課程を設定できるように配慮している。

本書では、様々な言語学習の背景や経験を持つ児童、生徒に対して、そのニーズに見合うよう、日本語学習の開始の時点様々を想定している。本書で示す日本語カリキュラムの枠組みでは、例えば話し、聞く能力ではある程度 (あるいは相当程度) 高い段階に達しているが、読み、書く能力についてはまだ低い段階にあるような生徒に対しても、適切な学習課程が組めるよう配慮した。

本書には、学習目的 (aims)、学習領域 (strands)、到達目標 (achievement objectives)、文型、表現の例と例文 (suggested structures, expressions and examples)、学習活動例 (suggested learning activities)、評価方法例 (ideas for assessment) を掲載しているが、これらは実際の日本語課程、授業の計画を立てる際の指針、参考である。

本書は、コミュニケーション、および言語伝達の技能を発展させることを目的として、より実践的、実践的な課程を構築するための指針とすることを目的として構成してある。そこでは様々な練習、復習を含めて、学習が螺旋的に進められるように考慮している。つまり、生徒は学習において螺旋階段を登るように、同じトピックやテーマでも学習段階に応じて、簡単な表現からより高度で複雑な表現が使えるようになるように設計されている。

教師は本書で設定している学習段階 (レベル、levels) に過度に縛られる必要はない。例えば、低いレベルや学年でも、生徒の興味や能力に応じて同じトピックで、より高度な内容の教材、教科書を用いる事もできる。

日本語の課程や授業計画を立てる際に、生徒の既に持っている知識や技能を活かして、できるだけ多くの有効な教具や人材を役立てる事が望ましい。学習項目に関連するトピックや教室で創造できる、あるいは使える状況設定は、各学習段階の学習活動例に示した。本書の補助資料 “Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material” にも、さらに多くの例や提案を掲載してある。

本書の構成

学習目標 (Aims)

言語学習の目的には一般的な学習目標と特定の到達目標がある。

日本語カリキュラムの学習目標 (Aims) は、8つの学習段階すべてに渡るものである

学習領域 (The Strands)

言語技能、コミュニケーション機能、日本文化の各項目は到達目標から導かれる。

到達目標 (Achievement Objectives)

各レベル毎に、3つの学習領域の項にまとめて挙げた。

文型、表現の例と例文 (Suggested Structures, Expressions and Example)

各レベルの難易度に従って、基本(参考)文型と表現例を挙げた。

学習活動例 (Suggested Assessment Activities)

生徒がコミュニケーション機能を充足させるのに適した、現実に即した状況設定、場面を挙げた。

評価方法例 (Suggested Assessment Activities)

教師または生徒が学習進度を測定するための例を挙げた。

学習目標 (Aims)

一般的な目標 (General Aims)

ここで言う一般的な目標とは、“The New Zealand Curriculum Framework”(p.10)の英語および外国語の項に示されているものと同様であるが、列挙すると、それらの目標とは、

- ・ 学校教育のできるだけ早い段階から外国語の教育を行う、
- ・ 語学全般に渡り、生徒の学力を伸ばし、自らの言語に対する深い洞察力を養う、
- ・ 社会的、知的、文化的に生徒の豊かな人間的発育を促す、
- ・ 異なる文化を持つ人々の思考、行動に対する理解力を養う、
- ・ 以って、国際的な友好関係、健全な貿易関係の発展に貢献する。

到達目標 (Achievement Aims)

生徒は、

- ・ 日本語の書き言葉、話し言葉を理解し、実際に運用できるようになる。
- ・ 目的に即して日本語でコミュニケーション、情報伝達ができるようになる。
- ・ 日本文化を理解し、日本語での意志、情報伝達における慣習を学ぶ。

学習段階 (Levels)

本書では学習段階として8つのレベルを設けているが、これは単純で易しいものから複雑で難しいものへとという配列になっている。学習段階の相違、レベルとレベルの間の違いは以下のような点を考慮している。

- ・ 学習活動の複雑さの程度
- ・ 用いられる言語表現の種類と範囲
- ・ 学習者の自立的学習能力の程度

本書で言う学習段階(レベル)は、学校の学年とは必ずしも一致していない。教師は生徒に合わせ、学校の定める時間割なども考慮した上で、適切な学習段階(レベル)を選んで学習課程を組む必要がある。本書の日本語カリキュラム - 学習段階1(レベル1)は何年生からでも始める事ができる。

(ここで日本語カリキュラムとニュージーランド学校教育国家認定資格(National Qualification Framework)との関連を述べる。)日本語カリキュラム - 学習段階6(レベル6)はニュージーランド学校教育国家認定資格のレベル1の段階に相当し、中等教育前期課程終了試験(日本語)(School Certificate Japanese)の出題基準(範囲)は、本書『日本語カリキュラム』の学習段階1(レベル1)から学習段階6(レベル6)までの学習の到達目標(学習項目)に基づいている。以下、日本語カリキュラム - 学習段階7(レベル7)は、上記国家認定資格のレベル2、日本語カリキュラム - 学習段階8(レベル8)は国家認定資格のレベル3に当たる。

中等教育機関で、日本語学習経験のある生徒を対象とする場合は、生徒の学習の程度に応じて、適切な学習段階(レベル)から課程を開始することには、何ら差し支えはない。

学習領域 (The Strands)

本書で述べる学習領域は、既に述べた3つの学習の到達目標に関連している。本書の学習領域は、言語技能 (Language Skills)、コミュニケーション機能 (Communication Functions)、日本文化事情 (Japanese Culture) の3領域から成るが、言語技能の領域は各学習段階 (レベル) の言語面で習得すべき技能を指し、コミュニケーション機能の領域は、生徒がどんな目的で言語を用いるかに関わる事柄であり、日本文化の領域は、日本語話者と有効な関係を築くのに必要な、日本語を使用する上での慣習に係わる項目である。

言語技能の領域 (Language Skills)

各学習段階で学習する言語技能を示してあるが、それらは大きく、口頭の言語 (聞く、話す) と書く言語 (読む、書く) に分けてある。

聞く (聴解)

- ・ 会話を聞いて理解し、適切に応答できる
- ・ 話された内容の要点を理解できる
- ・ 話された内容に付いて、その情報、意味、詳細を理解できる

話す (会話)

- ・ より複雑で、正確かつ流暢な会話ができる
- ・ より高度な社会的交流ができる
- ・ 公式、正式な場面で、自信をもって話せる

読む (読解)

- ・ 書かれた内容の要点を理解できる
- ・ 書かれた言葉 (文章) の、情報、意味、詳細を理解できる

書く (筆記)

- ・ 正確かつ流暢に書ける
- ・ 様々な形式を使い分け、例に従って文章が書ける

コミュニケーション機能 (Communication Functions)

この領域では、各学習段階で生徒が身につけるべきコミュニケーション上の機能を示している。また、実際の会話で、学習項目がどのように使われるかも提示した。各学習段階で異なる技能が提示されているかもしれないが、教師は生徒の学習段階に応じて、より複雑な文型、高度な語彙で同じ機能を果たすように、学習段階の間を螺旋的に移動することもできる。

あるコミュニケーション機能を、生徒の興味や学習進度に応じて、異なる場面設定で練習する事もできるだろう。普通、生徒は馴染みのある、あるいは既に理解している事柄を基礎に、馴染みの無い、経験したことがない事柄を徐々に学んでいくものである。生徒の興味や学習能力の発達に従って、より広く、関連する分野に学習の範囲を広げていく事もできるだろう。例えば、自分や家族、他の人々について話す、というトピックは、学習段階 1 (レベル 1) では、基本的な事柄をごく簡単に述べる事が到達目標だが、続く学習段階では、より多くの事柄を、より高度な語彙や複雑な文型で述べる事ができるようになる。

このようにみえてくると、感情や健康状態など具体的な事柄を表現するのは学習段階 5 (レベル 5) で扱うのが適当であろうし、国によって異なる習慣など、抽象的な思考や概念を表現するのは、学習段階 8 (レベル 8) で扱う、ということなどが適切な配列の例であろう。

日本文化事情 (Japanese Culture)

本書で言う日本文化事情とは、日本語の言葉の歴史を含めて、日本人の日常の経験、生活様式などを指す。この領域で生徒が学ぶ事柄は、日本文化について知り、それを尊重する事である。日本文化について学ぶ時も、可能な限り日本語を使うのが望ましい。例えば、「床の間」「玄関」「畳」などの語彙 (キーワード) は日本の家屋、住宅について話すとき自然に出てくるし、初級の段階で英語で説明する場合にも、このような語彙は日本語のままで使われるだろう。

文化的な教具、教材も適切に用いてほしい。“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material” の「社会文化項目 (Socio-Cultural Aspects)」に学習段階 1 から 6 までと学習段階 7 から 8 に分けて、日本文化事情関連のトピックの例を掲載した。教師自身もさらに適切な教材を探し、より広く、深く日本文化事情を紹介できるよう、心がけてほしい。そのためには、日常、より今日的な日本文化事情に関する情報を収集、アップデートするよう心がけてほしい。さらに発展させて、ニュージーランドの文化と (日本文化ばかりでなく) 他の文化を比較、対照する事も重要な学習活動である。

到達目標 (The Achievement Objectives)

本書で言う到達目標とは、各学習段階 (レベル) で、前述した各学習領域で生徒が何を身につけ、達成することが期待されているかを示したものである。

文型、表現の例と例文（Suggested Structures, Expressions and Examples）

各学習段階の学習項目として、文型、表現および例文を示した。表現については、生徒はその表現自体を学習し、（その学習段階では）その文型を応用して使えることまでは期待していない。本書に挙げた文型、表現および例文は、各学習段階の到達目標と“Japanese in the New Zealand Curriculum – Support Material”の関連する章も参照して欲しい。本書の文型、表現および例文は例または目安として挙げてあり、特にこれだけに学習項目を限定するものでもないし、過度にこれに縛られる必要もない。また、その提出順も生徒のニーズや各学校で使用している教材に合わせて、変更する事も一向に差し支えはない。本書は、その基本方針として学習の臨機応変さを目指しており、各学校、教育現場の状況に合わせて、各学習段階でより適切に学習課程（授業計画）を組めるように配慮している。実際の表現や用法に照らして不適切なものを除いて、文型や例文は辞書形（普通体）で示した。辞書形（普通体）は、できるだけ早い学習段階で導入し、練習を積むのが望ましい。

学習活動例（Suggested Learning Activities）

各学習段階（レベル）に挙げた学習活動例は、文型、表現、語彙、言語的スキルおよび日本文化を導入し、練習するためのものである。それらの例の多くは、複合的な学習活動である。（つまり、教室でもできるだけ自然な言葉の使い方が学べるよう、複数のコミュニケーション機能を含んでいる。）

ニュージーランドの学校は、生徒の（社会、文化的な）背景が多様で、特に低学年のクラスを担当している教師は、多種多様な学習活動を準備しておくことが必要である。一方、高学年のクラスでは生徒の将来の目標を考慮して、ここでも多様な学習活動が必要になるだろう。こうした点を考慮して、本書ではどの学年でも使えるような学習活動の例を挙げた。教室で、実際にこれらの活動を行う際には、生徒の知識や彼らの（社会、文化的）背景を考慮して、さらに教師が工夫を加えていくのが望ましい。生徒の興味やニーズなどを十分に考慮して学習課程を組むようにすれば、実際の学習はより楽しいものになる。

評価方法例（Suggested Assessment Activities）

本書で挙げた評価方法の例は、各学習段階（レベル）に合った、コミュニケーション状況を考慮して、生徒の学習進度を測定できる方法を選んだ。定期的に評価を行い、生徒の学習進度を測定してフィードバックを与える事は、生徒が学習を進めて行く上で重要である。評価には、教師が生徒の学習を観察することや学期や各課の終わりに行うテスト、教室で行うテストや宿題（課題）の形で行うものなどが含まれる。評価に際しては、生徒も自分の学習進度を自分で観察する（モニターする）ように指導することが望ましい。

各学習段階（レベル）に、自己評価や生徒同士で評価するための項目を挙げたが、これは生徒が自分で学習進度を認識できるように考えたものである。

評価は、基本的にコミュニケーション脈絡での言語スキルを評価できるものでなければならない。評価の方法は常に、何を評価しているかが明らかで、生徒にとって建設的なフィードバックを与えることができ、教師にとってはよりよい学習課程を組む助けになるようなものでなければならない。生徒も、評価の方法や手順を十分に理解できるように、明瞭で正確に伝える事も重要である。

評価は、学習の到達目標に沿って生徒の知識や技能の発達を継続的に測定していくプロセスである。従って、評価とは、

- ・ 生徒の学習の動機を高め、
- ・ 学習および教授方法の適切さを評価し、
- ・ 生徒の進歩した項目を評価し、より良い学習課程（プログラム）にするための情報を得ることができ、
- ・ 生徒や親（保護者）、学校および地域社会に、学習の進度を明確に示せるものでなければならない。

教師は、

- ・ 定期的、公式および非公式に生徒に、その学習進度を伝え、彼らのニーズや必要な学習上の手助けを配慮し、
- ・ 生徒の自己評価や相互評価（生徒同士の評価）の発達を助け、
- ・ 生徒一人一人の学習進度の記録を取っておく必要がある。

生徒は、

- ・ チェックリストを使って、学習進度を自分で記録し、学習している言語を使って、何ができるかを示せるようにし、
- ・ 何をどのように学んだかを反省し、学習の過程（プロセス）をよりよく理解し、それによってより効果的に学習を進めるよう努力し、
- ・ 会話の録音テープや作文、その他課題などをファイルして保存するのが望ましい。

評価では、学習活動の目的、言語の意味、内容、状況にあわせて用いられる言語技能を統合的に測定しなければならない。つまり、コミュニケーションの能力と言語的な正確さを計り、（極度に厳密な言語的正確さにのみ偏らず）予め想定される応答のみを期待するのではなく、生徒の全体的な、臨機応変な反応を観察するようにする。

言語の発達段階（The Stages of Language Development）

学習者の言語的な発達段階は、以下のような段階に大別して記述できる。

- ・ コミュニケーションの初発の段階（Emergent Communication）
- ・ サバイバル技能の段階（Survival Skills）
- ・ 社会的に通用する段階（Social Competence）
- ・ 自発的に言語が使える段階（Personal Independence）

各学習段階（レベル）の課題をこなしていくに従って、次の段階の課題も次第に楽にできるようになり、学習者の使う言語表現もより洗練されたものになっていくだろう。本書では、そのような言語の自然な発達段階を基本に想定しているが、普通のニュージーランドの生徒が日本語を外国語として学ぶ場合、学校教育の中で、最後の「自発的に言語が使える段階」まで到達するのは難しいだろう。

コミュニケーションの初発の段階（Emergent Communication）

この段階は、既に学習して慣れている語彙や、何度も練習した文型で表現されたことが理解でき、つまり、相手の反応、応答や会話の展開が予測できる場面でのみうまく言語が使える、という段階である。また、読み、書きについては、生徒は個人と個人のコミュニケーションの現場で見られる、明示的かつ典型的なものなら理解できるだろう。この段階では、教室では活発な言語活動ができる生徒でも、教室の外ではそうはいかないのが普通である。

サバイバル技能の段階（Survival Skills）

この段階では、日本人とコミュニケーションする場合、日常的な場面での会話ができ、ある程度臨機応変に学習した言語を応用し、新しい語彙が出てきた時にそれを脈絡からある程度は推測できる能力を獲得している段階で、読み、書く技能については、短い手紙やメモを書くことができる。より多くの日本文化に関連する事柄を理解し、実際に自分でそれらの知識を運用できるようになっている。前の段階に比べて、言語的にさらに自信を深めているとはいえ、場面によってはまだ、日本人とのコミュニケーションに躊躇することもある。

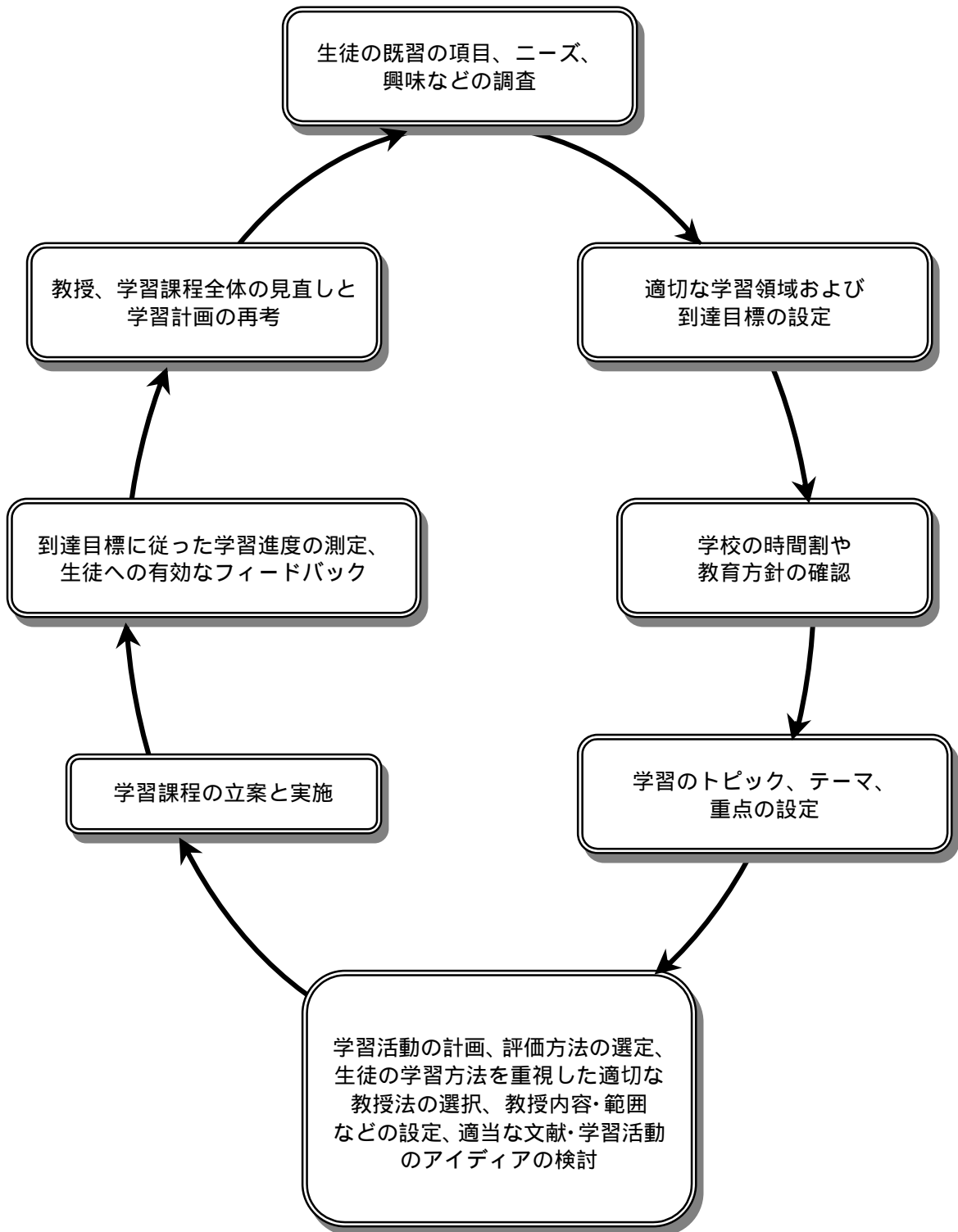
社会的に通用する段階（Social Competence）

この段階では、生徒は十分に自信を持って日本語を使う機会を自ら求めるようになる。外国人の日本語を積極的に理解しようとしてくれる日本語話者となら、生徒が会話を主導し、必要ならある程度以上の長さの会話を維持できる段階である。慣れた場面でなら、臨機応変に会話を展開し、あまり馴染みの無い場面でもある程度会話についていける。（「あまり馴染みのない場面」とは、生徒自身は体験した事がないが、学習課程で学んだことがあるような場面をさす。）基本的な文型を応用して使い、新しい言語表現を試してみたり、読み、書きについては独自の力で（ある程度）こなせる。生徒の行動様式も文化的により適切なものになり、日本人の価値観について十分に敏感になっている。

自発的に言語が使える段階（Personal Independence）

この段階では、生徒は日本人とのコミュニケーションに積極的に参加でき、会話では言われたことのほとんどを理解し、適切な応答ができるようになっている。自分の意見や考えを表現し、しかも創造的な表現ができるだろう。読み、書く技能については、まだ日本の実際のものを（独力で）読みこなすのは難しいにしても、それに近いものなら読める段階で、自分と年齢が近い日本語話者となら自由に会話が交わせるだろう。

学習課程の設定について (An Approach to Planning)



ニュージーランド国家資格認定の枠組みとユニット・スタンダード (The National Qualification Framework and Unit Standard)

本書は(ニュージーランドの学校教育における)日本語の教授、学習の展開に関する指針を示したものである。同時に、ユニット・スタンダード^(訳注³)、国家資格認定に関わる基本的な学習の枠組みを示したものである。ユニット・スタンダード自体は学習の単位そのものではなく、評価の基準を示したものである。

国家資格認定のための評価とは、学習の統合的な評価の一部として、各学校の教師によって行われるのが望ましい。NZQA (New Zealand Qualification Authority、国家資格認定委員会)はこの目的に添って、評価のための適切な助言を行う機関である。

ユニット・スタンダードでは、国家資格のレベルとして初等、中等教育の段階ではレベル1からレベル3の段階を出している。これらは、本書の日本語カリキュラムでは学習段階6(レベル6)から学習段階8(レベル8)に相当する。

(訳注³) 「ユニット・スタンダード」(Unit Standard)は、ニュージーランドの学校教育の全科目に渡る新しい評価方法として立案、試行されていたもので、社会科、数学などの科目では既に一部の学校でこの方法の評価が行われている。簡単にまとめると、現行の点数、偏差値による相対的評価を、記述的な絶対評価方法へ変更するものである。簡単に日本の学校教育での評価法の用語を借りて言えば、5段階評価を全廃して、すべての科目で「どのような学習項目がどの程度できるようになったか」を記述して示す方法である。従って、ほぼ全面的に現場の教師によって評価が行われる事が前提となっている。

日本語カリキュラムの改定も、2000年からの実施が予定されていたこの試験および評価方法への移行を前提として行われた。1998年には日本語カリキュラムのユニット・スタンダードによる試行試験が一部の学校で行われていたが、その年の終わりにニュージーランド教育相は、ユニット・スタンダードへの全面的移行の中止を発表した。変わって、1999年の始めに「到達評価法」(Achievement 2000)という、新たな評価法の導入を2000年から開始すると決定した。実際にはその導入は、2002年から延期されている。(2001年10月現在)

学習段階 1 (レベル 1)

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 1

この段階の生徒は「コミュニケーションの初発の段階 (Emergent Communication Stage)」にある。

学習領域と到達目標 (Strands and Achievement Objectives)

言語技能 (Language Skills)

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 聞く、話す技能について、生徒は簡単な文を理解し、適切に応答し、発話できる。
- ・ 読む、書く技能について、生徒は異なる表記 (平仮名など) を学び、簡単な単語や漢字を理解し、読み、書ける。

コミュニケーション機能 (Communication Functions)

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ あいさつできる。
- ・ 挨拶や紹介を理解し、適切に応答できる。
- ・ 自分や他の人を紹介できる。
- ・ 教室での日本語の指示や表現を理解し、適切に反応できる。
- ・ 0 から 20 までの数字を理解し、数字を使った表現ができる。
- ・ 感謝および謝罪を表現でき、適切に応答できる。

日本文化事情 (Japanese Culture)

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 人に会ったときの挨拶の慣習を理解する。
- ・ 日本と日本人について理解を深める。

学習段階 1 (レベル 1) のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階1 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目ができるようになる	文型、表現の例	例文
1. 挨拶する。	おはようございます。 こんにちは。 こんにちは。 さようなら。 じゃ、また。	
2. 挨拶や紹介を理解し、応答する。 3. 自分や他の人を紹介する。	~です。 はじめまして。どうぞ、よろしく。 ~ですか。 ~じん ~は？	わたしは~です。 こちらはもりさんです。にほんじんです。 にほんじんですか。そうです。 おなまえは？ でんわばんごうは？
4. 教室での表現、指示を理解し、適切に反応する。	しずかにしてください。 よくきいてください。 てをあげてください。 わかりません。 はい/ええ。 いいえ。 もういちど(おねがいします。) どうぞ。	
5. 0から20までの数字を使う。	数字：0 - 20 助数詞：~さい なんさいですか。	でんわばんごうは 699-0812 です。 じゅうさんさいです。
6. 感謝、謝罪を表現したり、応答する。	すみません(が) ...。 おそくなって、すみません。 (どうも)ありがとうございます。 いいえ、どういたしまして。 どうもすみません。	

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進度が測定できる
<p>日本 - ニュージーランドの生徒交流会で、挨拶し、自己紹介をする。</p> <p>教室での指示に従って、行動する。</p> <p>自分の名刺を作り、年齢、自宅の電話番号などの情報を交換する。</p>	<p>日本地図を使って、日本の主要な島と都市に英語の表示ラベルをつける。(日本文化)</p> <p>テープで自己紹介を聞き、シートに書かれた人とマッチさせる。(聴解)</p> <p>初対面の挨拶のロールプレイ(聴解、会話)</p> <p>テープの内容に従って、シートの絵に順番をつける。(聴解)</p> <p>「座ってください」「立ってください」「窓を開けてください」などの指示を聞いて、シートの正しい絵を選ぶ。(聴解)</p> <p>話された、または書かれた指示に従ってリストの中の適切なものをつける。(聴解、読解)</p> <p>話された内容と合っている絵を選ぶ。(聴解)</p> <p>教師の話す内容を聞いて、正しいか間違っているか判断する。(聴解)</p> <p>テープの質問や文を聞いて、適切な応答(答え方)リストの中から選ぶ。(聴解)</p>

その他の学習活動例

- ・ 大きな絵本を作る。
- ・ ボードに表示した時間に合わせて、生徒が教室の中を移動しながら、違う相手に適切な挨拶をしあう。
- ・ 挨拶をする、名前を聞く、別れの挨拶をする、お辞儀をするロールプレイをする。
- ・ 名札を用意して、「相手探し」のゲームをする。
- ・ 教室での指示、表現を使って「Simon Says^(訳注4)」のゲームをする。
- ・ 電話番号を聞きあう事で、数字を使った表現の練習をする。
- ・ 日本や日本語について知っている情報を交換する。
- ・ 日本のポスターを作る。
- ・ 世界地図を見て、日本の位置を確認する。日本地図の主要な島や都市に表示ラベルをつける。
- ・ 日本についてのビデオを見る。
- ・ 平仮名 50 音図を使って、発音の練習をする。
- ・ 日本の簡単な歌を歌う。
- ・ 日本語の数字でビンゴゲームをする。
- ・ 数えかたのゲームや「フルーツバスケット」ゲームをする。
- ・ 漢字「日本」「一、二、三、... 十」を学ぶ。
- ・ 書道のセットを使って、漢字の練習をする。

低学年の生徒には以下のような活動も有効だろう。

- ・ 色の語彙を学習し、文字の学習で書き順を違う色で示し、例えば第 1 画を青、第 2 画を赤という風に決め、正しい順番で仮名に色をつける。(鯉のぼりのパターンに、数字に従って色をつけていくゲームもできる。)
- ・ 歌とゲームで身体部位の名称を学ぶ。
- ・ 動物とその鳴き声を学ぶ。

(訳注4) 全員立ってゲームを始める。リーダーが「Simon Says...」と言った時はその動作をするが、このフレーズが無い時は動作をしない。間違えた者は座り、最後まで残った者が勝者となる。

評価方法例

教師は生徒が学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。

生徒はペアまたはグループ活動で互いに評価する事ができる。例えば、以下のような活動が生徒同士の評価に適しているだろう。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話（ダイアログ）の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 1（レベル 1）での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・ 自己紹介ができる
- ・ 友達の紹介ができる
- ・ 適切に人に挨拶ができる
- ・ 適切に人に別れの挨拶ができる
- ・ 20 まで数えられる
- ・ 自分の電話番号が言える
- ・ 謝罪の言葉が言える
- ・ 感謝の表現ができる
- ・ 教室での表現が理解できる
- ・ 日本の主要な島の名と位置がわかる
- ・ 日本の 6 つの主要な都市の名前と位置がわかる

学習段階 2 (レベル 2)

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 2

この段階の生徒は「コミュニケーションの初発の段階」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 短い会話を聞き、短い文章を読んで、要点を把握できる。
- ・ 短い会話ができる。
- ・ 平仮名といくつかの漢字を使って、短い文が書ける。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 自分や他の人の個人的なことを聞いたり、答えたりできる。
- ・ 0 から 100 までの数字が使える。
- ・ 好き、嫌いを表現したり、他の人に聞いたりできる。
- ・ 何かがほしいと言える。
- ・ 他の人に何かをしてくれるよう頼める。
- ・ 行為や活動、行事などについて理解し、簡単に描写できる。
- ・ 時刻、曜日、月を表す語彙が使える。
- ・ 行為や活動、行事の行われる時、場合を理解し、描写できる。
- ・ 行為や活動、行事の頻度が言える。
- ・ 日本語または英語で、物事を何と言うか聞き、答えられる。
- ・ お世辞やお祝いを言ったり、それに応答したりできる。

日本文化事情

- ・ 生徒は以下のような技能を獲得する。
- ・ 日本の学校生活について知り、説明できる。

学習段階 2 (レベル 2) のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階 2 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 自分や他の人の個人的なことを聞いたり、答えたりできる。	～か。(疑問の終助詞) ～は～です。 ～にすんでいる。 ～じゃない/～じゃありません 疑問詞：なに/なん～、どこ	どこにすんでいますか。 ニュージーランドにすんでいます。 日本じんですか。 いいえ、日本じんじゃないです。 どこからですか。かんこくからです。
2. 0 から 100 までの数字が使える。	数字：0 - 100 ～ねんせい	なんねんせいですか。 九ねんせいです。
3. 好き、嫌いを表現したり、他の人に聞いたりできる。	～が/は すき/きらい 助詞：と、や	なにがすきですか。 すうがくやりかがすきです。
4. 何かがほしいといえる。	～をください。	えんぴつとかみをください。
5. 他人に何かをしてもらえるよう頼める。	～てください。	すわってください。
6. 行為や活動、行事などについて理解し、簡単に描写できる。	～をする	やきゅうをします。
7. 時刻、曜日、月を表す語彙が使える。	時の表現：(～がつ/～ようび/～じ)です。	たんじょうびはいつですか。 さんがつです。
8. 行為や活動、行事の行われる時、場合を理解し、描写できる。	(時)に～をする 疑問詞：いつ 助詞：か	二じにやきゅうをします。 きんようびかどようびにれんしゅうをします。
9. 行為や活動、行事の頻度が言える。	よく/ときどき	よくべんきょうします。
10. 日本語または英語で、物事を何と言うか聞き、答えられる。	～は 日本ごで/えいごでなんですか。	やきゅうはえいごでなんですか。
11. お世辞やお祝いを言ったり、それに応答したりできる。	(お)たんじょうび、おめでとう。 ～がじょうずですね。 ～ね。 いいえ、まだまだ。 (どうも)ありがとうございます。	日本ごが(お)じょうずですね。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進度が測定できる
<p>学校に来たお客さんに日本語で挨拶し、自己紹介をする。</p> <p>生徒同士で、住所、国籍、年齢、好きなもの、嫌いなもの、誕生日などを聞きあう。</p> <p>毎日の活動と時間を、1週間の日記につける。</p> <p>平仮名、作文、スポーツ、数学、その他の活動で、クラスで賞品をあげることにして、その授賞式を行う。その際に、受賞の理由を述べる。</p>	<p>教師の話す内容を聞いて、正しいか間違っているか判断する。(聴解)</p> <p>多肢にわたる選択のリストを使って、好きなもの、嫌いなものに関するリストを完成させる。(読解)</p> <p>話された、または書かれた内容に合っている絵を選ぶ。(聴解、読解)</p> <p>自分の学校の時間割に関する質問に、口頭で、または書いて答える。(聴解、読解、会話、筆記)</p> <p>役割を交替しながら、会話をする。(聴解、会話)</p> <p>自己紹介の会話のロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>少し長い自己紹介など、クラスの前でスピーチをする。(会話)</p> <p>絵で示された人々の活動などを特定して表現する。(会話、筆記)</p>

その他の学習活動例

- ・ 話された内容に合っている絵を選び出す。
- ・ 教室にあるものに日本語の表示ラベルをつける。
- ・ 数字のビンゴをする。
- ・ クラスメートの好きなものに関する調査をする。
- ・ パントマイムで、物の名前を当てるゲームをする。
- ・ ゲーム「おおかみさん、今何時？」をする。
- ・ 漢字で日付や曜日を書く。
- ・ ある人の個人的な情報を含む文を聞いて、作文や書き取りをする。
- ・ 口頭の指示に従って、絵を描く。
- ・ 書かれた指示に従って、絵を描く。
- ・ 学習段階1(レベル1)で習った自己紹介を、さらに発展させた内容で発表する。
- ・ クラスで輪になって、右隣の人に誕生日や好きなものなどを聞き、それを左隣の人に伝える。
- ・ クラスで年齢や誕生日に従って、順番に並ぶ。
- ・ 「こんにちは、赤ちゃん」「結んで、開いて」などの日本の歌を歌う。
- ・ クラスメートの顔や身体の輪郭を描き、それに一人一人の特徴を描き込む。
- ・ 一人のクラスメートの特徴を記述し、名前を空白にしておく。他のクラスメートはそれを読んで、誰の事が当てる。
- ・ 学校を中心にした地図を用意し、生徒同士で住んでいる所を聞きあって、地図に名前を書き入れる。
- ・ ペアで、各自の時間割を聞きあう。
- ・ 平仮名を使って、「Battleships」のゲームをする。
- ・ (世界地図を用意し)世界各地の時間を調べて書き込む。
- ・ 身体を使って、平仮名、片仮名を書く練習をする。
- ・ 伝言ゲームで平仮名の練習をする。
- ・ 列になって背中に文字を書いて伝える「伝送ゲーム」をする。
- ・ 日本語の「かるた」をする。
- ・ 日本とニュージーランドの学校の時間割を比べる。
- ・ 日本の学校の生徒と通信をする。(文通など)
- ・ 好きなものや好きな事について教えあう。
- ・ 年齢に関連した祝い事や祭り(年中行事)のビデオを見る。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は 25 ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 2 (レベル 2) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・ 自分の出身と住んでいる所が言える。
- ・ 100 までの数字が使える。
- ・ 自分の好きな物・事、嫌いな物・事が言える。
- ・ 人に何かを依頼できる。
- ・ 何かをくれるよう、頼める。
- ・ スポーツや授業の科目について理解し、話せる。
- ・ 漢字で曜日や月が理解できる。
- ・ 時間の表現が理解できる。
- ・ 行動や、活動、行事について頻度が言える。
- ・ 日本語で何と言うか聞く事ができ、こうした質問に答えられる。
- ・ お世辞に対して適切に応答ができ、また人にお祝いなどが言える。
- ・ 平仮名を読み、書ける。
- ・ 日本の学校生活について話ができる。

学習段階 3（レベル 3）

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 3

この段階の生徒は「コミュニケーションの初発の段階」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 話された、または書かれた事柄の要旨を理解し、そのポイントを把握できる。また、その内容について適切に応答できる。
- ・ 学習した文型や語彙を応用して、日常的な会話場面でコミュニケーションができる。
- ・ 平仮名、片仮名、漢字を適切に用いて、学習した語彙や文型を表記できる。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 人、物、動物や場所について聞いたり、理解したり、表現したりできる。
- ・ 人、物、動物、場所を特定できる。
- ・ 人と物の関係を聞いたり、理解したり、表現したりできる。
- ・ 自分、他者、動物の描写を理解できる。
- ・ 自分、他者、動物を描写できる。
- ・ 自分の希望や要求を表現したり、他の人の希望や要求を理解して、それを受け入れたり、拒絶したりできる。
- ・ 人の誘いを受けたり、断ったり、また自分から誘ったりできる。
- ・ 空腹、喉の渇きなど、身体的な感覚を表現したり、他の人に聞いたりできる。
- ・ 日付が理解でき、使える。
- ・ 行為、行動の場所および頻度に付いて表現したり、他の人に聞いたりできる。
- ・ 現在、過去、将来の活動や予定について、聞いたり、理解したり、表現したりできる。

日本文化事情

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 日本人の家族生活について知識を深める。

学習段階 3（レベル 3）のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階3 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 人、物、動物や場所について聞いたり、理解したり、表現したりできる。	～が(数量)いる/ある 助数詞: ~にん、~ひき 疑問詞: どの/だれ/どれ/どなた	おにいさんがいる? あにがひとりいる。
2. 人、物、動物、場所を特定できる。	指示詞: この/その/あの、これ/それ/あれ、ここ/そこ/あそこ	せんせいのほんはどこですか。 あそこです。
3. 人と物の関係を聞いたり、理解したり、表現したりできる。	(名詞)の(名詞){所有、所属の助詞「の」}	ここは日本ごのきょうしつです。 ともだちのうちにいく。
4. 自分、他者、動物の描写を理解できる。	助詞「は」(主格指示) ～は(身体部位)が(形容詞)です	さかなはすきですが、にくはきらいです。 あねはせがたかい。
5. 自分、他者、動物を描写できる。	イ形容詞、ナ形容詞+名詞	くろいねこです。 げんきないぬはうるさいね。
6. 自分の希望や要求を表現したり、他の人の希望や要求を理解して、それを受け入れたり、拒絶したりできる。	～がほしい ～はいかが(ですか) ～でも(選択を聞く) ～はちょっと... いただきます けっこうです	のみものがほしい。 コーヒーでもいかが? コーヒーはちょっと... じゃ、コーラは?いただきます。
7. 人の誘いを受けたり、断ったり、また自分から誘ったりできる。	(動詞語幹)+ませんか。 (動詞-語幹)+ましょう おねがいします。 もしもし。 しつれいします	どうぶにうちにきませんか。 はい、いきます。 うたをうたいましょう。
8. 空腹、喉の渇きなど身体的な感覚を表現したり、他の人に聞いたりできる。	おなかがすきました。 のどがかわきました。	
9. 日付が理解でき、使える。	～ねん/～がつ/～にち	十二月二十三日はわたしのたんじょうびです。
10. 行為、行動の場所および頻度について表現したり、他の人に聞いたりできる。	(場所)に/へ(行為) (交通手段)で(移動) (道具)で(動詞) ～ぶん (時刻)に(動詞) (場所)で(行為)	がっこうにあるいていく。 くるまでかえる。 えんぴつでかいてください。 がっこうは八じ三十五ぶんにはじまる。 せんしゅうのきんようびにえいがをみた。 こうえんであそぶ。
11. 現在、過去、将来の活動や予定について、聞いたり、理解したり、表現したりできる。	(動詞-語幹)+ます/ません/ました/ませんでした	きのう、がっこうへいきましたか。 いいえ、いきませんでした。うちにいました。 でも、あしたはいきます。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進度が測定できる
<p>自分の家系図を作り、クラスメートや日本人のものと比較する。</p> <p>友達の家に参加したとして、そこで何をするか計画を立てる。</p> <p>蕎麦、寿司、お好み焼きなど、日本の食べ物を作る計画を立てて、実際に作り、試食する。</p> <p>日本人のお客さんに自己紹介をする準備をしたり、そのお客さんをもてなす計画を立てる。</p> <p>他のクラスの生徒や、日本の学校の生徒との交流のために、クラスメートのプロフィールを作る。</p> <p>食べ物、飲み物、ゲーム、プレゼントなどを考えて、誕生日のパーティーを計画する。</p>	<p>家族の写真やその他の絵について、書かれた、または話された描写を理解し、クラスメートとそれについて情報を交換する。(聴解、読解、会話、筆記)</p> <p>話された、または書かれた描写に従って、その内容と合っている絵を選ぶ、絵を完成させる、または描写と絵を合わせる。(聴解、読解)</p> <p>インフォメーションギャップを使って、日常の活動や週末のプランについて話す。(聴解、読解、会話、筆記)</p> <p>英語で書かれた、または言われた日付と漢字をマッチさせる。(聴解、読解)</p> <p>話された、または書かれた内容に従って、日記を完成させる、または内容をさらに発展させる。(聴解、読解、筆記)</p> <p>話された内容に従って、家系図を完成させる。(聴解)</p> <p>ある人、またはある人の活動について、短い話をする。(会話)</p> <p>先生に、趣味や日常の活動、家族などについてインタビューする。(聴解、会話)</p> <p>勧誘や断りなど、指示に従って会話をする。(聴解、会話)</p> <p>日本語の文を読んで、その内容について英語で答える。(聴解、読解)</p> <p>日本語の文章を読んで、穴埋めをし、補って文章を完成させる。(聴解、読解、会話、筆記)</p> <p>絵とその表示ラベルをマッチさせる。(筆記)</p> <p>片仮名語彙の書き取りをする。(聴解、筆記)</p> <p>友達に電話をかけて、外出の誘いをするロールプレイをする。(聴解、会話)</p>

その他の学習活動例

- ・ ゲーム「幸せな家族 (Happy Family)」をする。
- ・ 学校に来る方法、趣味、ペット、家族などについて質問を作り、クラスでアンケート調査をする。
- ・ 生徒各自が (実際の、または架空の) 家族のカードを作り、それに従って、お互いの「家族」を探す。
- ・ (自分、家族、他の人) を書いて描写する。
- ・ 家族の肖像を書く、または家族の写真等に表示ラベルをつける。
- ・ ペットについて話す。
- ・ 誰かを何かに誘う、またその誘いに対する返事をする。
- ・ 場所と交通手段のカードを作って、簡単な話をする。
- ・ 1 週間の活動を描写する。
- ・ 絵や写真を使って、人や物の位置を特定する。
- ・ ある描写を聞いたり、読んだりして、それが誰か、あるいは何か当てる。
- ・ 生徒の持ち物を使って、持ち主を探すゲームをする。
- ・ クラスメートの誕生日の一覧表を作る。
- ・ ニュージーランドと日本の将来のスポーツ (試合) のポスターを作る。
- ・ 日本の歴史の簡単な年表を作る。
- ・ 日本独自の (伝統的な) 食べ物について調べる。
- ・ 日本語の文章の穴埋め (選択肢から選ぶ) をする。
- ・ 箸の使い方を練習して、箸で何かをリレーするゲームをする。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は 25 ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 3 (レベル 3) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・人や動物の描写ができる。
- ・人と場所を特定できる。
- ・人と物の関連（所有、所属など）が言える。
- ・他の人に何かを要求したり、また人の要求に対して適切に応答できる。
- ・人を誘ったり、人の誘いを受けたりできる。
- ・空腹や喉が渴いている事を人に伝えられる。
- ・日付が言える。
- ・出来事、行事などの時間や場所が言える。
- ・自分がする事、しない事、した事、しなかった事などを話せる。
- ・箸が使える。
- ・平仮名全部と、いくつかの片仮名と漢字を読んだり、書いたりできる。

学習段階 4（レベル 4）

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 4

この段階の生徒は「コミュニケーションの初発の段階」および「サバイバル技能の段階（Survival Skills Stage）」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 短い会話を主導し、維持できる。
- ・ 平仮名、片仮名、漢字を使って、短い文章が書ける。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 人、物、動物の所在について理解し、聞いたり、話したりできる。
- ・ 自分や他の人の描写（衣服や職業など）を理解できる。
- ・ 自分や他の人（衣服や職業など）を描写できる。
- ・ 能力について表現できる。
- ・ 天候や気候について尋ねることができる。
- ・ 自分の行動や出来事について尋ねたり、表現したり、それらに関するコメントに対して応答できる。
- ・ 行動や出来事の頻度について理解したり、尋ねたりできる。
- ・ 行動や出来事の順序を理解したり、尋ねたりできる。
- ・ 行動や物事の順序を描写できる。
- ・ 簡単な指示を求めたり、その指示に反応したりできる。

日本文化事情

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 日本の家、日本人の余暇や日本の年中行事について理解し、理解した事柄を表現できる。

学習段階 4（レベル 4）のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階 4 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 人、物、動物の所在について理解し、聞いた り、話したりできる。	～は～にある／にいる 指示詞：こちら／そちら／あちら ／どちら ～にちかい、～からとおい	うちはがっこうのそばにある。 きのしたにいぬがいる。 おくにはどちらですか。 うみからとおい。
2. 自分や他の人の描写 (衣服や職業など)を 理解できる。	～ている 形容詞の否定形 形容詞の過去形 イ形容詞+くて ナ形容詞／名詞+で 名詞+も(助詞) ～につとめている／～ではたら いている ～が、～ですが、(but)	あのひとはめがねをかけている。 せがたかくない／くなかった。 おもしろくなかった。 しごとはむずかしかった。 めがおおきくて、きれい。 ゆうめいで、おかねがたくさんある。 ははもちちもぎんこうにつとめている。 そのシャツはたかいですが、いいです。
3. 自分や他の人(衣服や 職業など)を描写でき る。		
4. 能力について表現でき る。	～ができる ～よ(終助詞) ぜんぜん+否定形	ネットボールができる?できるよ。 サッカーがぜんぜんできない。
5. 天候や気候について尋 ねることができる。	名詞／形容詞+でしょう	あしたはあめでしょう。
6. 自分の行動や出来事につ いて尋ねたり、表現 したり、それらに關す るコメントに対して応 答できる。	(動詞 - 語幹) + にいく ～ている(進行相)	レストランへたべにいく。 まどのそばにすわっている。
7. 行動や出来事の頻度につ いて理解したり、尋 ねたりできる。	～かい(助数詞) あまり+否定形	いっしゅうかんにいっかいれんしゅうす る。 まいにちバスにのって、まちにいく。 あまりじてんしゃをつかわない。
8. 行動や出来事の順序を 理解したり、尋ねたり できる。	(人)といっしょに 副詞 て形(文の接続) ～てから、 (時刻)～から～まで	かぞくとはなみにいく。 きれいにかいてください。 はやくおきる。 九じごろおふるにはいって、ねる。 おきてから、シャワーをあびる。 四じから五じまでピアノをれんしゅうす る。
9. 行動や物事の順序を描 写できる。		
10. 簡単な指示を求めたり、 その指示に反応し たりできる。	(場所)～から～まで	ここからしんごうまでいって、みぎにまが る。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進度が測定できる
<p>テレビの天気予報の真似、ファッションショーの司会、自分の地域についての観光客向けの紹介などをする。</p> <p>学校や、自分の地域に関する一般的な情報や、特別な場所の紹介などを作る。</p> <p>日本の学校との交流会を想定して、地域のオリエンテーリングのポイントや、自分の地域の観光パンフレット、ガイドの準備をする。</p> <p>学校や近隣の地域について、日本からのお客さんに説明書を書いて、送る。</p> <p>日本で、ホームステイ先の家族に話す練習として、自分の家族の写真や家やレジャーの写真等を見せて説明する。</p> <p>姉妹校に送るものとして、ニュージーランドの学校生活の一日のビデオを作る。</p>	<p>調査結果の報告をする。(会話、筆記)</p> <p>天気予報を読んだり、聞いたりして、地図に書き込む。(聴解、読解)</p> <p>話に順番をつける。(読解)</p> <p>ナレーション、または書かれた指示に従って、地図のルートをマークする。(読解、聴解)</p> <p>ナレーション、または書かれた記事にしたがって、スケッチや絵を完成させる。(聴解、読解)</p> <p>絵を見て、それについて描写する。(会話、筆記)</p> <p>ナレーション、書かれた指示に従って、適切な描写を選択肢から選ぶ。(聴解、読解)</p> <p>選択肢から適切な語彙を選んで、文章を完成させる。(聴解、読解)</p> <p>週末やレジャーについて、短い話をする。(会話)</p> <p>日本である家庭を訪問するロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>絵と関連する表示ラベルをマッチさせる。(読解)</p> <p>英語で、ある程度の長さの文やナレーションを要約する。(聴解、読解)</p> <p>日記をつける。(筆記)</p>

その他の学習活動例

- ・ なくしたものの、迷子、ディスプレイの中からはなくなったものについて、描写する。
- ・ 動物や人の絵の、頭と胴体を切り離して、それを表示ラベルに従ってマッチさせる。
- ・ 日本風の家やアパートをデザインして、その各部分に表示ラベルをつける。
- ・ 西洋風の衣服のデザインを考え、それに片仮名で表示ラベルをつける。
- ・ 想像上の犯罪者、迷子や友達の描写を考える。
- ・ 「Real People」のカードを使う。
- ・ クラスメートについて、スポーツ、レジャー、家族の職業などを調べ、その結果を発表する。
- ・ グループで短い話を作り、それを部分毎に切り離し、それを他のグループが再構成する。
- ・ 「連作物語」をする。あるグループが最初の一文を作り、次々にグループが一文ずつ加えて、一つの物語として完成する。
- ・ 絵を描き、それを見せずに他のグループまたはパートナーに説明して、絵を再構成させる。
- ・ ゲーム「Guess Who」をする。
- ・ 「スリーヒント・ゲーム」をする。
- ・ 一人がある職業を表すパントマイムをし、他の人がそれを当てる。
- ・ 消去ゲームをする。
- ・ 1週間の天気の詳細を取る。
- ・ 自分の地域に関する情報を使ったペア・ワークをする。
- ・ 「福笑い」または「Pin the Tail on the Donkey」をする。
- ・ 日本の祭り、四季、年中行事、家屋に関するポスターを作る。
- ・ 兜、雛人形など、年中行事に関連する折り紙をする。
- ・ 日本の家屋や服に関するビデオを見たり、文献を探したりする。
- ・ 日本の着物や履き物を試してみる。
- ・ 片仮名の練習で、カードを使ったゲームをする。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は 25 ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 4 (レベル 4) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・人や動物の所在について描写できる。
- ・自分のできることとできないことが言える。
- ・天気、天候について表現できる。
- ・出来事を順序に従って描写できる。
- ・道順について説明したり、理解したりできる。
- ・片仮名が全部書ける。
- ・漢字を 30 個、読んだり、書いたりできる。

学習段階 5（レベル 5）

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 5

この段階の生徒は「サバイバル技能の段階」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 日常生活場面での会話を通して、必要な情報を得たり、伝えたりできる。
- ・ 内容に論理的な矛盾のないようなメモや短い手紙の文章を読んだり書いたりできる。
- ・ 正確かつ流暢に平仮名、片仮名、いくつかの漢字が書ける。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 数量を表現できる。
- ・ 許可を求めたり、禁止したりできる。
- ・ 希望、要求の表現ができ、またそれらに対して応答できる。
- ・ 授受表現ができる。
- ・ 他の人や出来事などについて感想を言ったり、聞いたりできる。
- ・ いつ行事や出来事が起こったかを理解でき、またそれについて尋ねることができる。
- ・ 人、場所、事物について比較して述べる事ができる。

日本文化事情

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 買い物、贈り物の習慣など、日本での日常生活場面での慣習について理解を深め、それを表現できる。

学習段階 5（レベル 5）のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階 5 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 数量を表現できる。	助数詞: ~かい / ~こ / ~さつ / ~せん / ~だい / ~はい / ~ひき / ~ほん / ~まい / ~めだけ	にくやでぎゅうにくを 300グラムだけかった。 二千元だった。
2. 許可を求めたり、禁止したりできる。	~てもいい だめ。 / いいよ。	みかんを二こたべてもいい？ いいよ。でも、二こだけよ。
3. 希望、要求の表現ができ、またそれらに対して応答できる。	(名詞)にする (動詞 - 語幹) + たい	ひるごはんはなににする？ ぼくはおこのみやきにする。 わたしはやきそばをたべたい。
4. 授受表現ができる。	あげる / もらう	たんじょうびなにをもらった？ あねに / から CD をもらった。 ははのひになにをあげる？
5. 他の人や出来事などについて感想を言ったり、聞いたりできる。	イ形容詞 (語幹) + すぎる ナ形容詞 (語幹) + すぎる おいしそう。 おもしろそう。 イ形容詞 (語幹) + くなる ナ形容詞 / 名詞 + になる どうしましたか。 ~がいたい。	ボーリングはたかすぎる。 くらくなるからはやくかえりましょう。 あたまがいたい。じゃ、これをのんで。
6. いつ行事や出来事が起きたかを理解でき、またそれについて尋ねることができる。	もう + (肯定形) (yet, already) まだ + (否定形) (not yet) (名詞) のまえに (名詞) のあと (で)	もう、げんきになった？ もうたべましたか。 いいえ、まだたべていません。 あさごはんのまえにシャワーをあびる。 ばんごはんのあとですいえいをする。
7. 人、場所、事物について比較して述べる事ができる。	(形容詞) の の (特定する助詞「の」) A は B より	もっとやすいのはありませんか。 せんせいのやまださんです。 ボーリングはすいえいよりたかい。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進度が測定できる
<p>プレゼントの交換会を企画する。</p> <p>地域のフェスティバルでどんな食べ物を用意するか、話し合う。</p> <p>クラスの遠足の場所を決め、持っていくもの、買うもの、食べ物、服装などを話し合う。</p> <p>クラスで昼ご飯を食べに行くレストランを決め、実際に行った後、報告を書く。</p> <p>日本の学校の生徒に手紙を書いて、学校の規則、禁止事項について聞く。</p>	<p>電話で買い物の指示を受けて、買い物のリストを作る。(聴解、筆記)</p> <p>医者やレストランでの会話のロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>クラスで、プレゼントとしてほしいものの調査をして、誰に何をあげるか相談する。(聴解、筆記)</p> <p>感覚(痛い等)を示したイラストを見て、描写する。(会話、筆記)</p> <p>電話の話を聞いてメモを取り、先生に電話の内容を伝える。(聴解、読解、筆記)</p> <p>レストランに電話をかけて、注文をする。(聴解、会話)</p> <p>教室に店を設定して、客と店員のロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>絵を見て情報を交換し、その絵に関する文章を完成させる。(読解、筆記)</p> <p>感覚、感想、比較対照、出来事の時間について情報を交換する。(聴解、読解、会話、筆記)</p> <p>日本語の情報を読んだり、聞いたりして、英語で質問に答える。(聴解、読解)</p> <p>ナレーションや会話を聞いて、あるいは絵を見て、選択肢から正しい答えを選ぶ、または正誤を判断する。(聴解、読解)</p>

その他の学習活動例

- ・ ほしい物のリストを作る。
- ・ レストランのメニューについて話し合う。
- ・ 贈り物をする場面でのロールプレイをする。
- ・ 絵にキャプション、註、タイトル、見出しをつける。
- ・ 似ている絵を見て、異なっている点をさがす。
- ・ インフォメーションギャップを使って、デパートの売り場や、品物の値段を書き入れたり、バーゲン品の情報を交換する。
- ・ 友達の家や医者へ行くロールプレイをする。
- ・ 出前を頼む。
- ・ 「町へ行って、 を買いました。」のゲームをする。
- ・ ホームステイで日本へ行ったとして、ホームステイ先でできること、マナー、食べ物などについて聞く。
- ・ 食べられるもの、してもいいことなどのリストを作る。
- ・ どのレストランへ行くか、何を食べるか、何を着ていくか等話し合う。
- ・ 絵を見て、知っている語彙を探す。
- ・ 漢字ビンゴをする。
- ・ 日本のスーパーやデパートの広告を見る。
- ・ 日本の包装紙など使って、その中の知っている漢字や片仮名をさがす。
- ・ 地域で、どこで日本食品などを入手できるか、情報を交換する。
- ・ (学校の文化祭などで)日本の食べ物を売る。
- ・ 表示ラベルを使って、自動販売機を作る。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は25ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 5 (レベル 5) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・自分が買いたい物を言い、値段を聞ける。
- ・許可を求める表現が使える。
- ・他の人に何が好きか聞ける。
- ・自分があげたもの、もらったものを言える。
- ・自分の健康状態について描写できる。
- ・物事を比較して言える。
- ・ある事柄がすでに起こったかどうか聞ける。
- ・ある特定の事柄について聞いたり、描写したりできる。
- ・日本の店での客に対する丁寧な表現が理解できる。
- ・漢字を 40 個、読んだり、書いたりできる。

学習段階 6 (レベル 6)

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 6

この段階の生徒は「サバイバル技能の段階」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 聴解、読解について、様々な形式の文章の要旨を理解でき、またその脈絡に従っていくつか新しい語彙を把握できる。
- ・ 日常的な場面で、書き言葉、話し言葉を臨機応変に使える。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 道順を人に尋ねたり、教えたり、またその指示に反応できる。
- ・ 他の人の希望や要求を理解したり、尋ねたり、また自分の希望や要求を表現できる。
- ・ 他の人に何かをするように、またはしないように要求できる。
- ・ 行動や出来事の描写を理解したり、またそれに反応したりできる。
- ・ 複合文(より複雑な文型)を使って、行為や出来事を表現できる。
- ・ 勧誘された内容について、それを理解したり、それについて尋ねたり、またそれに賛成、あるいは反対の理由を表現できる。
- ・ 他の人のできること、できないことを理解したり、それについて尋ねたり、自分のことについてそれを表現できる。
- ・ 他の人の好きなこと、嫌いなことを理解したり、それについて尋ねたり、自分のことについてそれを表現できる。

日本文化事情

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 公共の交通機関を利用したり、何かの予約をしたりするような、広範な場面で、日本人と交渉でき、そうした場面での慣習について理解を深め、それを表現できる。

学習段階 6 (レベル 6) のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階 6 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 道順を人に尋ねたり、 教えたり、またその指 示に反応したりでき る。	(移動の動詞 - 普通体肯定形)+ と (場所)を(方向)にまがる	えきまでいきたいんですが... このみちをとおって、ひとつめのかどをみ ぎにまがると、えきがみえます。 どのぐらいかかりますか。 じゅっぶんぐらいかかります。
2. 他の人の希望や要求を 理解したり、尋ねたり、 また自分の希望や要求 を表現できる。	(動詞 - 普通体肯定形)つもり	らいねんだいがくに行くつもりだ。
3. 他の人に何かをするよ うに、またはしないよ うに要求できる。	イ形容詞+くする/ ナ形容詞+にする たべないでください。 いかないでください。 はなさないでください。 ~てはいけない	このドレスをすこしやすくしてください。 へやをきれいにしてください。 たばこをすってはいけない。
4. 行動や出来事の描写を 理解したり、またそれ に反応したりできる。	(動詞 - 語幹)+ながら	ウォークマンをききながらしゅくだいを する。
5. 複合文(より複雑な文 型)を使って、行為や 出来事を表現できる。	~たり~たりする	しゅうまつは、パーティーでともだちとは なしたり、ダンスをししたりした。
6. 勧誘された内容につ いて、それを理解したり、 それについて尋ねた り、またそれに賛成、 あるいは反対の理由を 表現できる。	助詞：から(理由) なぜ/どうして/どうしたん ですか。 (身体部位)がいたいんです。 (動詞 - 語幹)+すぎる	もくようびはいそがしいからできない。 あたまがいたいんです。 なぜですか。いいえ、おそくまでべんき ょうしすぎました。
7. 他の人のできること、 できないことを理解し たり、それについて尋 ねたり、自分のこと についてそれを表現で きる。	(動詞 - 辞書形)+ことができる	かんじをかくことができる。
8. 他の人の好きなこと、 嫌いなことを理解した り、それについて尋ね たり、自分のことにつ いてそれを表現でき る。	(動詞 - 普通体肯定形)+の/こ と(名詞化)	えいがをみにいくのはどう? なっとうをたべるのがすき。 きってをあつめるのがすき。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進捗が測定できる
<p>日本から学校訪問に来る生徒のために、以下のようなことを準備する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の地図を作り、日本語で表示ラベルをつける。 ・ 学校の規則や活動について説明する。(書く) ・ 売店で売っている物のリストを作る。 ・ 課外活動のリストを作る。 ・ 可能なホームステイ先をさがす。 <p>学校へ日本人生徒が来た想定して、以下のような事をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校へ来る方法を説明する ・ 歓迎のスピーチをする ・ 日本へ持ち帰るのに適したお土産の提案をする。また、それらがどこで買えるか、大体の値段なども教える <p>日本人生徒を連れて行くのに適した場所を考えて、短い旅行などを計画する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行く場所の選択肢を話し合う。また、その理由も考える ・ 予約をする ・ 道順を聞く <p>来年勉強する科目を決めて、その選択理由も挙げて、話し合う。</p>	<p>ナレーションに従って、地図上の道(ルート)をさがす。(聴解、読解)</p> <p>他の人のライフスタイルについて聞いたり、読んだりした後、自分が好むライフスタイルについて発表し、クラスで話し合う。(読解、会話、筆記)</p> <p>ある記事を読んで、そのポイントをリストアップする。または、記事の空白を埋める。(聴解、読解、会話)</p> <p>ブラインドेटについて、理由を挙げて、賛成、反対を話し合う。(会話、筆記)</p> <p>ワークシートを使って、余暇活動または科目の選択について、生徒とその選択した事柄をマッチさせる。(聴解、読解)</p> <p>絵に従って、物語の順序を再構成する。(読解)</p> <p>旅行の目的地について話す。(聴解、会話)</p> <p>パートタイムの仕事の面接のロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>求人広告について、電話する、面接の時間を決める、などのロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>日本で自分ができそうな仕事について問い合わせる手紙を、日本の友達に書く。(筆記)</p> <p>日本の友達に、ニュージーランドでしたいこと、見たいものなどを聞く手紙を書く。(筆記)</p> <p>日本の友達に、自分が計画している事とその計画の理由を述べた手紙を書く。(筆記)</p> <p>日記をつける。(筆記)</p>

その他の学習活動例

- ・ 学校の周辺で「宝さがし」をする、またはそのための指示を作る。
- ・ 複合文を使って、学校周辺の道の説明をする。
- ・ 学校のクラブ活動への勧誘広告を作る。
- ・ 同じ事ができる、またはできないクラスメートをさがす。
- ・ 好き、嫌いが共通しているクラスメートをさがす。
- ・ 来年の計画について、クラスでアンケート調査をする。
- ・ 日本へ旅行する、または日本に滞在するとして、持っていくものとその理由をつけたリストを作る。
- ・ ニュージーランドの学校の1年間の活動を表したポスターを作る。
- ・ 自分の学校を描いた、壁に貼れる絵を作って、日本の学校に送る。
- ・ 日本 - ニュージーランドの「旅行ゲーム」を作る。
- ・ 日本の街やレジャー、日常活動に関するビデオを見たり、記事を読んだりする。
- ・ 日本の街の地図を作る。
- ・ 小さい、簡単な人形、指人形などを作って、人形劇をする。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は25ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 6 (レベル 6) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・道順を聞いたり、説明したりできる。
- ・自分のしたいこと、予定を言える。
- ・自分や他の人が、してはいけないことを表現できる。
- ・出来事の描写を理解し、それらを相互に関連付けられる。
- ・何かをする、あるいはしない理由が言える。
- ・自分ができること、あるいはそうする理由が言える。
- ・自分の好きな物や事と、その理由が言える。
- ・少なくとも 50 個の漢字を読んだり、書いたりできる。

学習段階 7 (レベル 7)

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 7

この段階の生徒は「サバイバル技能の段階」から「社会的に通用する段階(Social Competence Stage)」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 話された、あるいは書かれた事柄の詳細を理解し、要約できる。
- ・ 予測できない脈絡でも臨機応変に会話を主導し、維持できる。
- ・ 論理的な構成で自分の意見や思考を表現する長い文章が書ける。また、さらに漢字の知識を増やす。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 人、物、場所について比較、対照できる。
- ・ 人、物、場所、経験を描写できる。
- ・ 何かの仕方、方法について理解したり、また尋ねたりできる。
- ・ 何かの仕方、方法を説明できる。
- ・ 目的について、理解したり、尋ねたり、表現したりできる。
- ・ 一連の出来事や行為の順番を理解し、それに応答できる。
- ・ 出来事や行為をその継起に従って描写できる。
- ・ 他の人が言ったこと、書いたことを別の人に伝える事ができる。
- ・ 贈答の習慣やそうした場面での応答を理解し、また適切に反応できる。
- ・ 物事の可能性、不確実性を理解したり、尋ねたり、表現したりできる。

日本文化事情

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 日本人の現代の生活様式について知識を深め、日本人の価値観や生活態度について理解する。

学習段階 7 (レベル 7) のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階 7 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 人、物、場所について比較、対照できる。	A と B と (では) どちら (のほう) が (形容詞) ですか。 A より B のほうが (形容詞) A は B とおなじくらい (形容詞) A は B ほどイ形容詞 (語幹) + くない / ナ形容詞じゃない (です)	日本とニュージーランドとでは、どちらのほうがぶっかがたかいですか。 さかなとにくと (では) どちらをよくたべますか。 コーヒーはこうちやおなじくらいおいしい。 ハミルトンはクライストチャーチほどおおきくない。
2. 人、物、場所、経験を描写できる。	(動詞 - 普通体) ことがある ~ たことがある ~ してみる まだ (still) 連体修飾 ~ そう (見かけ、様態)	日本へいくことがある。 パチンコをしたことがある。 えいがはなんじだろう。でんわしてみる。 あのせんせいはまだわかいですね。 みぎにあるボタンをおす。 あのひとはしんせつそう。
3. 何かの仕方、方法について理解したり、また尋ねたりできる。	どうやって (動詞 - 語幹) + やすい、にくい (動詞 - 語幹) + かた	どうやっておもちをつくりですか。 たべにくいです。 このきかいはなんのためですか。つかいかたをおしえてください。 ワープロをつかわないで、てでかく。
4. 何かの仕方、方法を説明できる。	~ ないで ~ ないてください (名詞) のように	やまのようにおってください。
5. 目的について、理解したり、尋ねたり、表現したりできる。	~ ため (に)	くるまをかうためにアルバイトをする。
6. 一連の出来事や行為の順番を理解し、それに応答できる。	~ ているあいだ / ~ ているあいだに (動詞 - 語幹) はじめる / おわる / つづける	コーチがみているあいだ、いっしょうけんめいした。 日本にいるあいだに、ふじさんにのぼった。 あしたからにっきをつけはじめる。
7. 出来事や行為をその継起に従って描写できる。	~ てしまう (動詞 - 辞書形) まえ (に) ~ たあとで ~ ておく ~ と (接続詞) ~ とき	じゅんぴをしてみました。 オークランドにくるまえ、シドニーにすんでいた。 たべたあとで「ごちそうさま」という。 きっぷをかっておく。 チョコレートを食べると、ふとる。 オークランドにいったとき、くつをかった。
8. 他の人が言ったこと、書いたことを別の人に伝える事ができる。	~ という / ~ とかく ~ そうだ (伝聞) (伝言 - 普通体) とおつたえください	いしださんは「パーティーにぜったいいく」といった。 あのホテルはやすいそうだ。 かいぎは五じにおわるとおつたえください。
9. 贈答の習慣やそうした場面での応答を理解し、また適切に反応できる。	(~ に ~ を) あげる / やる / さしあげる ~ (~ に ~ を) もらう、いただく (~ は / が ~ を) くれる、くださる	ともだちにほんごのじしょをあげた。 おじいさんに / からおとしだまをもらった。 せんせいがわたしのたんじょうびにすばらしいほんをくださった。 いぬにえさをやった。
10. 物事の可能性、不確実性を理解したり、尋ねたり、表現したりできる。	~ とおもう ~ かもしれない なに / どこ / いつ / だれ + か なに / どこ / いつ / だれ + も ~ ない なに / どこ / いつ / だれ + でも しか ~ ない (動詞 - 普通体) だろう / でしょう	そのことばはまだじしょにないとおもう。 あしたのしあいをみにいくかもしれない。 だれかきた? だれもこなかった。 いつでもいい? いいえ、どうぶ (に) しかできない。 十ぶんしかやすみじかんがない。 いしださんはあしたくるでしょう。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進 度が測定できる
<p>日本とニュージーランドの高校生活や余暇活動を比較して、スピーチをしたり、レポートにまとめたりする。表やグラフ、写真なども使うのが望ましい。</p> <p>家庭でのマナーや食べ物などの情報も含めて、ニュージーランドでホームステイをする日本人高校生のためのガイドを作る。</p> <p>学校の食堂について、場所、内装、開店時間、メニュー、値段、値段、栄養価や生徒の好みなどを調べて発表する。</p> <p>売店や行事の内容なども入れて、学校の文化祭のポスターを作る。</p> <p>日程、宿泊場所、活動などを含めて、日本またはニュージーランドでの旅行計画をたてる。</p> <p>クラスメートのテレビに関連した習慣、テレビを見る時間や番組などを調査して発表する。</p> <p>クリスマスパーティーの企画をする。時間、場所、招待客のリスト、プレゼント、余興、出し物の順番などを決め、ゲームのルールやパーティーの準備についても話し合う。</p>	<p>旅行、メニュー、会う場所などについて、いろいろな選択肢を話し合う。(聴解、会話)</p> <p>テレビの料理ショーのまねごとをする。(会話)</p> <p>何かの説明文を正しい順番にならべる。(読解)</p> <p>クリスマスやお正月についての説明文の空白に正しい動詞を入れる。(読解、筆記)</p> <p>ニュージーランドのクリスマスについて描写したり、説明したりする。(会話、筆記)</p> <p>旅行についての手紙を書く。(筆記)</p> <p>ホームステイ先の家族にお礼の手紙を書く。(筆記)</p>

その他の学習活動例

- ・ フローチャートを使って、何かの過程を説明する。
- ・ 他の国々のマナーやエチケットに関する記事を読む。
- ・ グループでボードを使ったゲームを作る。
- ・ 自分の好みを言って、メニューの選択肢を話し合う。
- ・ 何かの試合の実況放送を聞いて、何の試合か考える。
- ・ 指示に従って、折り紙をする。
- ・ 日本の駅の切符の自動販売機の説明をする。
- ・ インタビューまたはアンケート調査の結果を分析して、クラスで発表する。
- ・ 生徒が持ちよって作った「福袋」から物を順番に取り出して、だれから何をもらったかクラスで言う。
- ・ 自分の将来の目標、計画について、クラスで話したり、作文を書いたりする。
- ・ 与えられた情報に従って、絵や短い文章の順番を正したり、物語を完成させたりする。
- ・ 旅行社で予約をするロールプレイをする。
- ・ 情報センターに電話をかけて、情報を得る。
- ・ 何かの発表（記事）の要約をする。
- ・ 何かのゲームについての説明を聞いて、それが何のゲームか当てる。
- ・ カードに書かれた物を説明し、他の人がそれは何か当てる。
- ・ クラスメートの趣味や食べ物の嗜好について調査し、その結果を比較、対照して説明する。
- ・ スポーツの試合などの結果を予測する会話を作る。
- ・ 様々な日本の宿泊施設について調べ、それぞれの良い点を比較する。
- ・ 日本とニュージーランドの家族のありかた、家族の行事などを比較する。
- ・ 日本とニュージーランドの宗教、または宗教に関連する場所について調べる。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は 25 ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 7 (レベル 7) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・人、物、場所の比較ができる。
- ・経験について描写できる。
- ・何かの使い方や、し方について説明できる。
- ・行為の目的を表現できる。
- ・出来事を順序立てて表現できる。
- ・何かの報告ができる。
- ・贈答の習慣を理解し、そうした場面で適切な応答ができる。
- ・何かの可能性、不確実性を表現できる。
- ・起こりそうな事を表現できる。
- ・漢字を 80 個読んだり、書いたりできる。

学習段階 8（レベル 8）

Japanese in the New Zealand Curriculum Level 8

この段階の生徒は「社会的に通用する段階」にある。

学習領域と到達目標

言語技能

この段階で生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 慣れている社会的な場面で、臨機応変に日本人とコミュニケーションができる。
- ・ 話された、または書かれた事柄についてその詳細を理解し、そこから導かれる結論や推測を理解できる。
- ・ 基本的な文型、表現を自在に応用して、自分の意見や見解を表現できる。

コミュニケーション機能

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 決定されたことがらや決意を理解したり、表現したりできる。
- ・ 何かをするよう他の人に依頼したり、依頼されたことを理解できる。
- ・ 他の人のために何かをすることについて理解したり、表現したりできる。（授受表現「て」形）
- ・ 助言を受けたり、求めたり、与えたりできる。
- ・ 何かについて、その利点、弱点およびその理由を表現できる。
- ・ 行動や出来事に関する疑問、可能性、確実性、不確実性を理解したり、尋ねたり、表現したりできる。
- ・ 何かができる能力、あるいはできないことを理解したり、尋ねたり、表現したりできる。
- ・ ある行動や出来事に条件付けられることがらについて理解したり、尋ねたり、表現したりできる。
- ・ （生徒の学習段階、ニーズに合わせて）選択され、編集された記事を翻訳できる。
- ・ 適切な自動詞、他動詞を用いて、行為や状況を描写できる。

日本文化事情

生徒は以下のような技能を獲得する。

- ・ 社会、経済、環境問題など、日本とニュージーランドの双方に関連する問題について調査し、理解を深める。

学習段階 8（レベル 8）のコミュニケーション機能に関する到達目標には、文型、表現と例文を挙げた。次ページの表には、この段階で適当と思われる学習活動や評価方法の例も挙げてある。コミュニケーション機能には、読む、書く、聞く、話すの 4 技能と日本文化事情に関する理解も含まれている。

学習段階 8 コミュニケーション機能、語彙及び学習活動例

コミュニケーション機能 生徒は以下の項目が できるようになる	文型、表現の例	例文
1. 決定されたことがらや決意を理解したり、表現したりできる。	動詞（普通体）ことになる 動詞（普通体）ことにする もう + 否定形（no longer/not any more） 動詞（普通体 - 肯定形）+ つもりはない / 動詞（普通体 - 否定形）+ つもり	やちんがあがったので、もうすこしちいさいところにひっこしすることになった。 ボーナスをもらったから、あたらしいくるまをかうことにした。 もうにくをたべないことにした。 もうたばこはすわない。 わたしはだいがくにいくつもりはない。 だれにもいわないつもりだった。
2. 何かをするよう他の人に依頼したり、依頼されたことを理解できる。	～してほしい	はやくかんじをおしえてほしい。
3. 他の人のために何かをすることについて理解したり、表現したりできる。（授受表現「て」形）	～てもらう、～ていただく ～てくれる、～てくださる ～てやる、～てあげる / ～てさしあげる	ともだちにしゅくだいをてつだってもらった。 せんせい、このさくぶんをなおしてくださいませんか。 おばあさんにあおいセーターをかってあげた。
4. 助言を受けたり、求めたり、与えたりできる。	～たらいいですか ～なければならぬ ～なくてもいい ～たほうがいい	どうしたらいいですか。 あしたびょういんにいかなければならぬ。 きっぷをまえにかわなくてもいいですか。 いいえ、ゴールデンウィークだから、よやくしたほうがいいですよ。
5. 何かについて、その利点、弱点およびその理由を表現できる。	～し～し ～ので ～んです / ～のです	べんりだし、やすいし、かってください。 からだにいいので、まいにちのんでいる。 どうしてじゅぎょうをやすんだんですか。 あたまがいたかったんです。
6. 行動や出来事に関する疑問、可能性、確実性、不確実性を理解したり、尋ねたり、表現したりできる。	間接疑問：～かどうか～ / ～か～ ～はずだ	ひこうきにまにあうかどうかわからない。 ニュージーランドたいしかんはどこにあるかしていますか。 えきのちかくにあるから、やちんがたかいはずです。 らいげつ、（お）かねがはいるはずです。
7. 何かができる、またはできないことを理解したり、尋ねたり、表現したりできる。	動詞 - 可能形	えいごがはなせる。
8. ある行動や出来事に条件付けられたことがらについて理解したり、尋ねたり、表現したりできる。	（名詞）なら ～たら （動詞）ても / でも イ形容詞（語幹）+ くても ナ形容詞 / 名詞 + でも	いしゃならおかねもちだろう。 こうこうをそつぎょうしたら、だいがくにはいりたいとおもう。 もし100万ドルあったら、なにをかう。 きゅうりょうがやすくて、そのかいしゃにはいりたい。
9. （生徒の学習段階、ニーズに合わせて）選択され、編集された記事を翻訳できる。	～によると ～について	このしんぶんによるとじしんがあったそうだ。 こうがいもんだいについてかいてください。
10. 適切な自動詞、他動詞を用いて、行為や状況を描写できる。	自動詞、他動詞	ドアがあく。ドアをあける。ドアがあいている。 三じにかえる。四じにほんをかえす。 どうぞあがってください。 てをあげてください。

学習活動例 例として以下のような学習活動がある	評価方法例 教師は以下のような活動を通して、生徒の学習進捗度が測定できる
<p>ニュージーランドに移住してきた日本人のために、ニュージーランド人の生活、気候、家屋、家族、職業、教育、違う国での生活に関する一般的な注意などを含めて、案内、ガイド、説明を作る。</p> <p>日本からニュージーランドへ仕事をしに来たがっている人に、就職状況、仕事の時間、平均的な給料、応募の仕方などの情報を含めて、助言をする。</p> <p>高校卒業後、すぐ高等教育に進学することや、働いてから進学することの利点や、不利益、あるいは交換留学プログラムの良い点などについて話し合うセミナーの準備をする。</p> <p>生徒会などで、学校の規則、制服、環境問題について話し合うロールプレイをする。</p> <p>都会に住む人、田舎に住む人の役割を決めて、それぞれの利点、弱点を述べながら、二つの生活の違いをロールプレイで話し合う。</p> <p>日本で相撲や野球を見に行くとして、切符の買い方を話し合い、力士や選手の強さなどを検討して、試合の結果を予測する。</p> <p>ニュージーランドと日本、またはどちらかの食べ物、食生活に関する、イラストをつけたレポートを作る。</p> <p>日本の大学で勉強しているとして、英語の家庭教師のアルバイトを探しているという広告を考える。</p> <p>お土産屋で休日の間のアルバイト募集に応募するとして、これまでの仕事の経験や技能を説明する。</p> <p>旅行案内、広告を読んで、日本人の友人のための旅行計画を作る。</p> <p>日本の雑誌に、家族構成の変化などの現代的なトピックの記事を投稿する。</p>	<p>カードに示された状況が起ったとして、その可能な結末、結果について話し合う。「～たら、」の文型を使う。(読解、筆記)</p> <p>ラジオでの広告を作る。(読解、会話、筆記)</p> <p>書かれた、または話された、何かについての賛成および反対意見を要約する。(聴解、読解、筆記)</p> <p>ある提案に対して、その利点と弱点を述べた文章を、論理的なものに再構成する。(読解)</p> <p>ビデオやテレビ番組、記事の内容を、日本語または英語で要約する。(聴解、読解、会話、筆記)</p> <p>家の借り手と家主のロールプレイをする。(聴解、会話)</p> <p>雑誌の写真に、キャプション、タイトル、見出しをつける。(筆記)</p>

その他の学習活動例

- ・ 様々な情報源から得た情報にしたがって、日本とニュージーランドの家庭生活などを比較し、話し合う。
- ・ 「Dear Abby」の手紙やポスターを書く。
- ・ 寄付集めの活動を企画する。
- ・ 日本を離れる時のお礼のスピーチを考える。
- ・ 旅行計画について助言を求める手紙を書く。
- ・ ニュージーランドの街についての案内を要約する。
- ・ ビデオを見て、その内容を要約する。
- ・ テレビ番組の音声を消して、そのアクションに説明をつける。
- ・ 何かに関する選択について、その利点と弱点をあげる。
- ・ 「Kite-flying」の練習をする。一人一人が意見を表明し、次々に賛成、または反対の意見を述べる。
- ・ 日本で列車の切符をなくした、旅館に泊まりたい、などの場面を考えて、どうすればいいか話し合う。
- ・ 就職とキャリアについて話し合う。
- ・ 様々な宿泊施設と宿泊客をマッチさせる。
- ・ 日本の旅行案内、広告を読む。
- ・ 「 てくださいませんか」の表現を使って、ペアでロールプレイをする。
- ・ 日本人にアンケート調査をして、その結果を発表する。
- ・ 歌を歌う。歌を聞いて、歌詞の空白を埋める。
- ・ 「たばこを吸ったら病気になるかどうか分からないけど、お父さんとお母さんはきっと怒ってしまうよ」などの忠告、警告、助言などを作る。
- ・ 新しい製品の市場調査のロールプレイをする。
- ・ 新製品の紹介（発表展示会）よく似ている他の製品への批判、車に貼る広告、キャンペーンなどの準備をする。
- ・ 始めの人には4分（例）で意見を伝え、次の人には3分で伝え、次へは2分、というように順次短い時間で同じ内容の意見を伝える練習をする。
- ・ 「Running Dictation」をする。
- ・ 雑誌に記事を投稿する。
- ・ 他の生徒がワープロで書いた物語の結末、結び、結論を書く。
- ・ 漢字ビンゴをする。
- ・ 部首と漢字のかるたゲームをする。
- ・ 部首を使って「ストップウォッチ漢字」をする。

- ・ 100 万ドルあったら何をするか、なぜそうするかを話し合う。
- ・ ニュージーランドにとって日本が、貿易などの面で重要である事などを説明し、13 年生でも日本語学習を続けることの利点を言う。
- ・ ある出来事の起こった理由、原因の適切なものを選ぶ。
- ・ 「 だから、私は できます。」という文章をできるだけたくさん作る。
- ・ 日本の少数民族問題、就職、公害問題などについて情報をさがし、話し合う。

評価方法例

教師は生徒が上記のような学習活動を行っているところを観察して、進度を測定することができる。生徒同士の評価方法の例は 25 ページに示した通りであるが、以下に再録する。

- ・ 学習した語彙や表現について互いに質問しあう。
- ・ 書かれた会話の役を交替して読む。
- ・ お互いに質問しあう。
- ・ インフォメーションギャップを使った学習活動をする。
- ・ コンピュータを使って、学習する。

学習段階 8 (レベル 8) での自己評価には以下のチェックリストが使えるだろう。

自己評価チェックリスト

- ・ 決定された事柄を言える。
- ・ 他の人に、何かしてくれるよう頼める。
- ・ 他の人にしてあげたことについて話せる。
- ・ 他の人に助言ができる。
- ・ 自分がしなければならないこと、しなくてもいいことを言える。
- ・ 何かについての説明ができる。
- ・ 選択肢について話し合うことができる。
- ・ 何か起こりそうな事柄について言える。
- ・ 自分ができる、またはできないことについて言える。
- ・ もしも何かが起きた場合、次に何が起こりうるか言える。(条件節が使える)
- ・ ビデオや音楽、ニュース記事の要旨や特徴が把握できる。
- ・ 少なくとも 125 の漢字を読んだり、書いたりできる。